

第6章 熟議が大学生に与える影響

～能力の自己認識とテーマや熟議手法からの学び～

1. 「熟議」が大学生を育てる ～「汎用的能力」の育成～

(1) 「質的転換答申」が求める能力とアクティブ・ラーニング

平成24年8月、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(答申)が中央教育審議会により取りまとめられた。

その中核となる内容は、大学が「生涯学び続け、主体的に考える力」を育む高等教育の場となるために、主体的な学修を促す「学士課程教育の質的転換」が必要であるという点である。

この「質的転換答申」の前段階として、「学士課程答申」(平成20年12月)がある。文部科学省のまとめによれば、『我が国の大学が授与する学位としての学士が保証する能力の内容として「知識・理解」、「汎用的能力」、「態度・志向性」及び「総合的な学修経験と創造的思考力」を挙げ、各大学が学位授与の方針を明確化することを促した』ものである。いわゆる「学士力」が位置づけられたわけである。この後、これを獲得することを保証する仕組みや制度が整えられていくが、状況は大学によって開きのあるものであった。

「質的転換答申」において、質的転換の意味は「国民一人一人が主体的な思考力や構想力を育み、想定外の困難に処する判断力の源泉となるよう教養、知識、経験を積むとともに、協調性と創造性を合わせ持つことのできるような大学教育への質的転換」と説明されている(下線は著者による)。また、ポスト工業社会における成熟社会においては、「我が国が生み出した固有の価値を異なる文化的・言語的背景を持った人々に発信できる能力、異なる世代や異なる文化を持った相手の考え方や視点に配慮しつつ、意思疎通ができる能力」を育成する必要があるとしている(下線は著者による)。

これらの考え方を土台として、実際に、大学教育ではどのような取組みをして行けばよいのだろうか。兵庫大学では、平成23年度4月に3つのポリシーを設定し、教育課程とシラバスの関係の明確化、4年間の科目履修の体系や順次性を表すカリキュラムマップ、ナンバリングの導入を行ってきた。そして今、求められているのが「質的転換」を実現するための具体的な教育改革・教育改善である。兵庫大学では、今後の事業のなかに、アクティブ・ラーニングを推進する授業についての研修会、研究会実施と推進を設定している。

「質的転換答申」では、(1)予測困難な時代に地域社会や産業界を担う人材の育成が必要であり、(2)大学が地域の拠点となっていく「地域を支え、地域を創る」人材の育成には「汎用的能力」の涵養が不可欠としている。これは、地域の「知の拠点」として、地域づくり、地域の活性化、地域の人材育成を使命のひとつとしている兵庫大学の方針と重なっている。

兵庫大学では、「汎用的能力」は学士課程教育全般にわたって育成しているが、とくに専門教育の学びの土台となる初年次を主とした教養科目やゼミナール科目による学修を重視している。また、数年前より、各科目で目標とする「身につける力」をシラバスに明示し、学生が授業目標や身につけるべき能力を意識して学修に取り組むよう指導している。

この「汎用的能力」の育成には、知識・技術の伝達だけではない教授法の転換が求められる。答申でも、「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である」としている。

今後、大学教育では、正課での教養教育、ゼミナール科目を中心として授業形態や授業方法の工夫を行い、能動的学修(アクティブ・ラーニング)を促していく必要がある。また、正課外でも、ボランティアやインターンシップ、政策立案や地域づくり関連の地域プロジェクトなど様々な機会を利用して学びを豊かにしていくことが求められる。

(2) 「汎用的能力」養成の手法としての兵庫大学の「熟議」

熟議は、ここまで見てきた「質的転換答申」の趣旨とそれに沿った具体的な方策と合致している点が多い活動であり、その意味で教育的成果が期待できる学習・活動と位置づけることができる。地域に目を向け、地域について考え、地域の問題を解決するという目的だけでなく、その手法のなかにも「汎用的能力」を身につけるための経験や学習が多く盛り込まれている。

兵庫大学の熟議は地域のさまざまな世代、職業の方々が集い、協働して地域のことを考える場である。これは、まさに上でみた「異なる世代や異なる文化を持った相手の考え方や視点に配慮しつつ、意思疎通ができる能力」を培う機会となるであろう。また、参加者が公平な立場で参加でき、お互いの意見を尊重するワークショップ形式という議論形態からの学びもある。

また、汎用的能力（大学レベルでは一般に、論理的思考力や批判的思考力、問題解決力などがあげられることが多い）について、熟議では、第1回より、熟議の教育的効果に着目し、「社会人基礎力」を参考として、「自主性」「思考力」「規律性」など10項目（p.163参照）を設定して、熟議の事前事後で自己評価の変化をみてきた。

また、年々「熟慮の段階」の資料やデータを充実させるとともに、今年度は、ウェブを用いて自主的にテーマや基本用語を学習できるようにした。さらに、大学生は、事前にワークショップの手法を学ぶ5回の研修会を受講している。これは、授業の前に授業内容を学習してから授業に臨む「反転授業」の手法と共通点が多い。また、高校生、大学生ともに事後アンケートを実施し、大学生に対しては、熟議終了後、ファシリテーターとワークショップ参加者が共に、振り返りのためのグループワークを行っている。

熟議の本番とも言える「議論の段階」だけでなく、「熟慮の段階」を重視する兵庫大学の熟議手法は、アクティブ・ラーニングの基本となる学習の事前準備・事後展開を含むものとなっており、学生の主体

的な学修の確立のために必要とされる「教員と学生あるいは学生同士のコミュニケーションを取り入れた授業方法」とも重なり合う。

「熟議」を経験することで、大学生のなかにどのような変化が起こっているのだろうか。何を不得、何をどのように活かして行こうと考えているのか。このことを検証していくことは、これから地域に貢献する人材にもとめられる能力やスキルなどをどう捉えるのか、またどう育むのかといった課題の検討にも役立つのではないか。

本章では、このような考え方に立ち、大まかに以下の流れで大学生の変化を検討する。

1. 参加した大学生の特徴と「熟議」による変化（事前の状況）
2. 自己認識シートの分析（事前事後の変化）
3. 大学生は「地域の安全・安心」についてどう考えたか（事前事後の変化）
4. 大学生は「熟議」をどのように経験し、どう活かすのか（事後の状況）
5. 「熟議」終了後のふり返りグループワークから（事後の状況）
6. まとめ ～「熟議」の経験とその効果～

分析では、熟議の事前と事後に行った自己認識シート、事前・事後アンケートを中心に用いる。また、熟議終了後に実施した振り返りのためのグループワーク時の作業シート（自由記述）も参考にする。ただし、あくまでも自己評価であることに留意し、学生の内部に起こったことを推測するにとどめることとする。

2. 参加した大学生の特徴と「熟議」による変化

本節では、熟議への参加を通して、大学生の自己認識にどのような変化があったのか概観する。兵庫大学の熟議は今年で4年目となるが、第1回目から熟議の教育的効果に注目し、熟議前後の参加者の変化を測る自己認識シートを開発した。「自主性」「思考力」「会話力」「計画力」「規律性」など10項目にわたり汎用的能力の変化を知るためである。

節目を迎えた本年度の報告として、分析には過去のデータも参照し、考察を行う。なお、自己認識シートの回答者は事前では23名、事後は23名である。また、事前事後アンケートについては、事前事後の比較のため両方に回答した11人を対象とする。

(1) 「熟議」に参加した大学生の特徴

今回参加した大学生は、兵庫大学の学生23名である（男子7名、女子16名：ファシリテーター12名、ワークショップ参加者11名）。また、学科でみると、看護学科4名、経済情報学科2名、栄養マネジメント学科3名、健康システム学科6名、社会福祉学科2名、こども福祉学科4名、保育科2名となっている。

熟議の大学生に対する影響を見る前に、ここでは、どのような大学生が参加したのか全般的な傾向について押さえておく。

1) 熟議の認知度と参加理由

「熟議」という言葉を「今回初めて知った」学生が100.0%となっており、兵庫大学が主催する熟議が4年目を迎え、学生の間で「熟議」が知られていないことから、今後関連の行事やミニ熟議など、正課内でも正課外でも進めて行く必要があるだろう。因みに、今回参加した高校生では、「熟議の内容を含めよく知っていた」「言葉では聞いたことがあった」を合わせると35.7%に上っている【図6-2-1】。

「熟議2015 in兵庫大学」に参加した理由は、「学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから」が81.8%となっており、高校生の85.7%と同程度である。しかし、「加古川地域の安心・安全」というテーマに関心があるからは18.2%と、高校生の2.4%と比べ高いと言える【図6-2-2】。

なお、「大学が主催する事業に参加したいから」については0.0%となっており、大学生として地域づくりに関する行事や活動への関心度を高め、大学の地域貢献に関わる活動を促進していく必要がある。

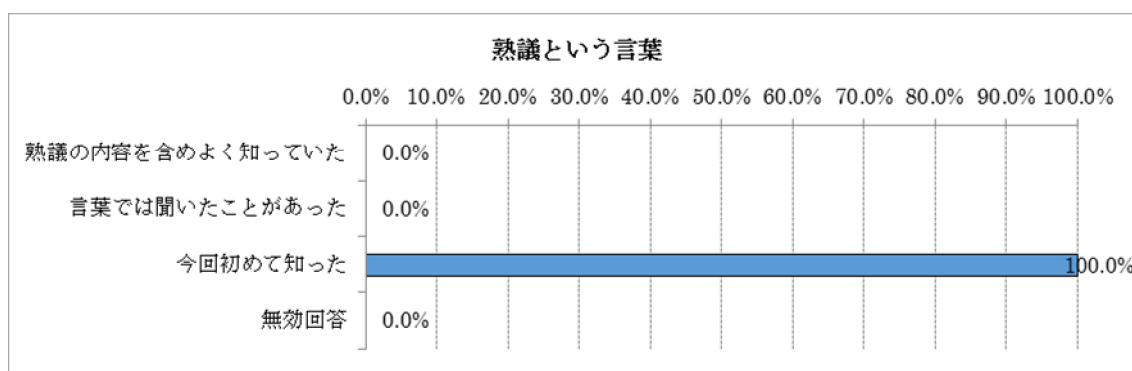


図 6-2-1 熟議という言葉

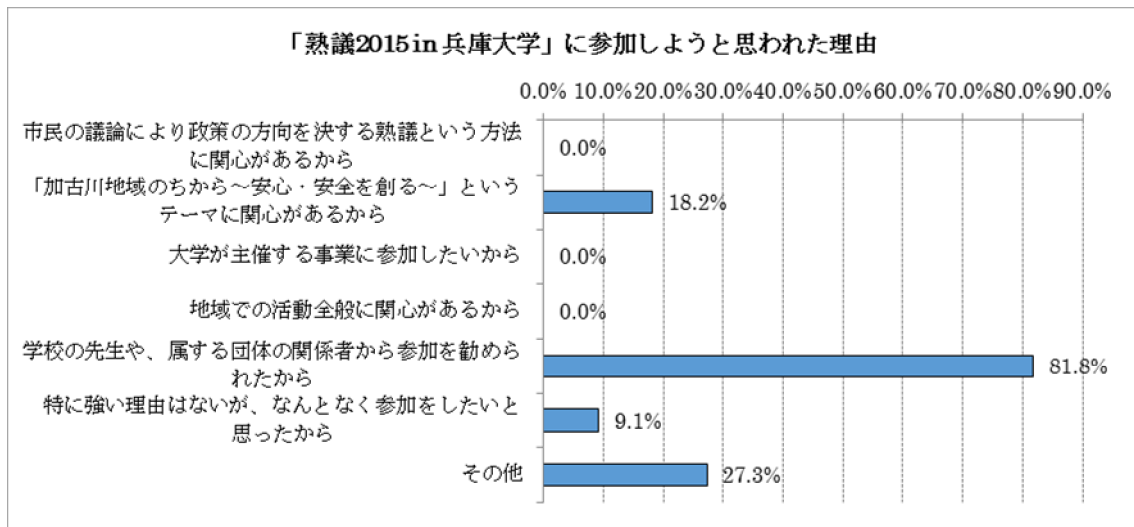


図 6-2-2 「熟議 2015 in 兵庫大学」に参加しようと思われた理由

2) ワークショップ経験と議論形態について

それでは、参加学生は熟議の本番に行われる「ワークショップ」についてどのような経験をもっているのだろうか。第5章で見たように、高校生では、「現在も多くの機会を経験することがある」11.9%（昨年0.0%）、「機会が少ないが、現在でも経験することがある」が28.6%（昨年17.1%）とこれまでに比べ、ワークショップ経験者が比較的多い（p.94【図5-2-3】参照）。これに対して、大学生は、「これまでにほとんど経験したことがない」が81.8%を占めている【図6-2-3】。今後、中学・高校段階からワークショップなどのアクティブラーニングを経験した生徒が大学に進学してくることから、大学教育でもますます教授法の工夫が求められる。この点からも熟議の教育上、学習上の効果について考察していく必要があるであろう。

今年度の熟議でも昨年度に引き続き熟議専用サイトを設け、これまで以上に自主学習のコンテンツを充実させた。その影響もあり、熟議の進め方について「十分に理解することができた」と「大体は理解することができた」を合わせると72.7%となっている【図6-2-4】。高校生では88.1%に上っていた（p.95【図5-2-4】参照）。

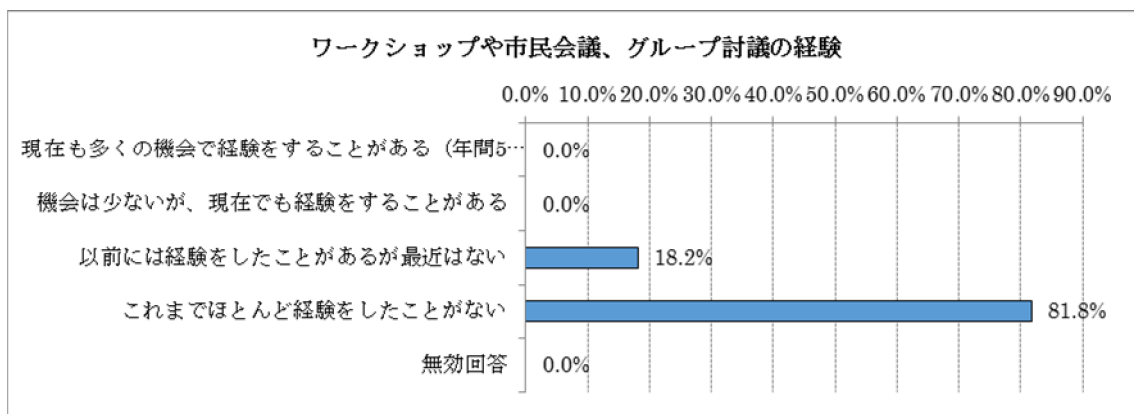


図 6-2-3 ワークショップや市民会議、グループ討議の経験

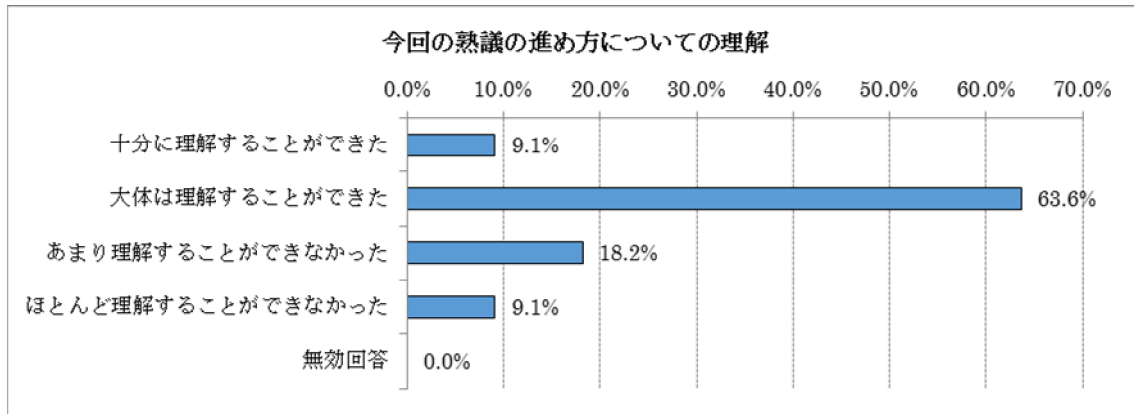


図 6-2-4 今回の熟議の進め方についての理解

また、熟議における「議論の段階（当日のテーブルでの討議）」への期待について、「他の人の意見を聞くことへの期待が大きい」とする割合が36.4%（高校生47.6%）であり、「どのように議論が進むのか、進め方を知る期待が大きい」についても36.4%（高校生11.9%）となっている。この点は、高校生との関心の違いが表れている【図6-2-5】。

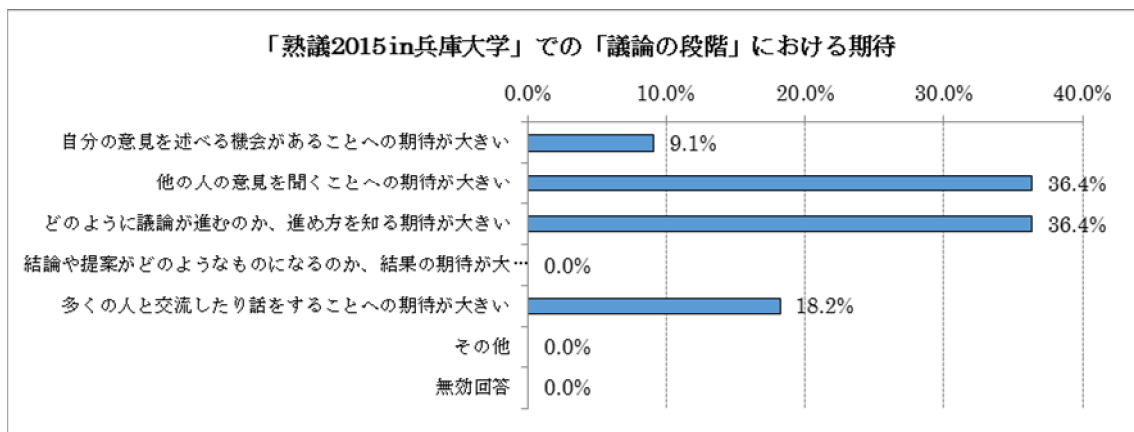


図 6-2-5 「熟議 2015 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待

それでは、大学生は、熟議のような議論形態についてどのような考えをもっているのだろうか。「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点について、72.7%が「多様な考えを知る機会がある」（高校生71.4%）と捉えている。一方、悪い点については、「感情的な対立が残ってしまう」が最も多く27.3%となっている。高校生で最も多い項目が「議論だけではまともな決められない」が31.0%であるのと対照的である。参加した大学生は熟慮（討議の前の段階）の時点では、少なからず議論の成果に消極的な態度が見受けられる【図6-2-6】【図6-2-7】。

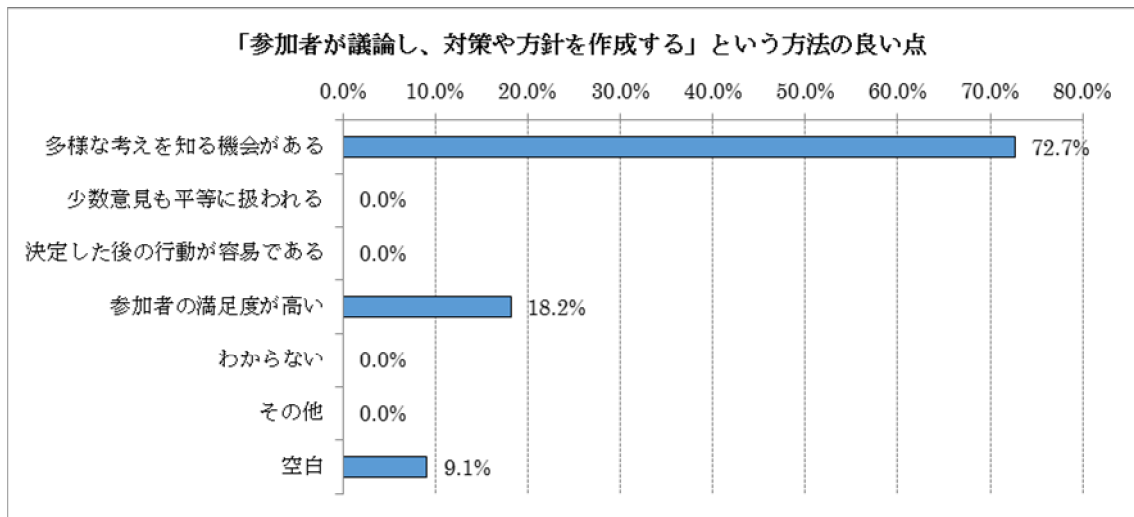


図 6-2-6 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点

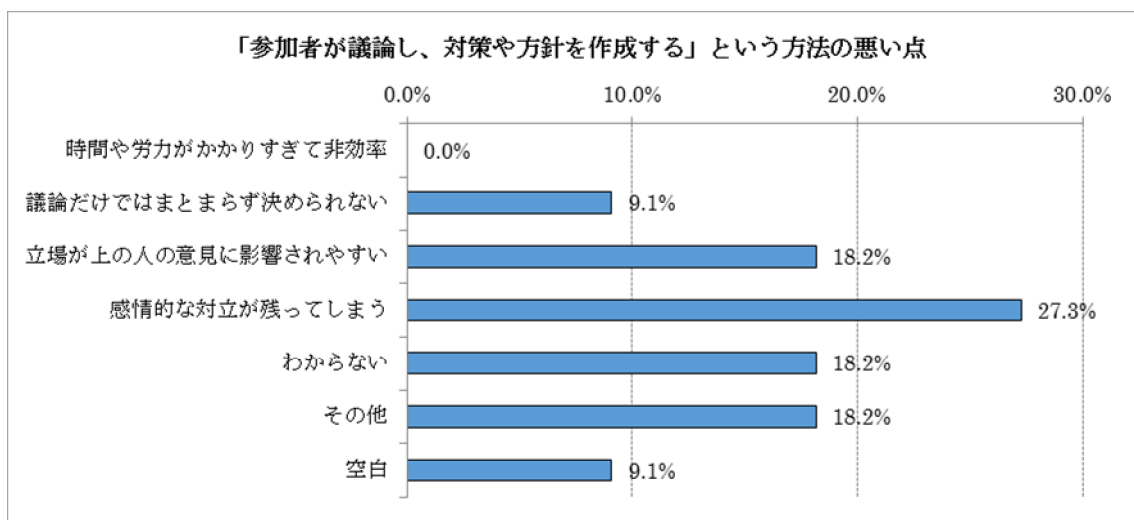


図 6-2-7 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の悪い点

ここまでのデータを見ると、参加した大学生の約80%は「他の人に勧められて参加したが、ワークショップを経験したことがない者がほとんどであり、熟議を通して、「他の人の意見を聞き、議論の進め方や多様な考えを知る機会としたい」ようだ。一方で、熟議の形態について「感情的な対立が残ってしまう」点を悪い点として挙げていることから、討議の進行に対する不安が感じ取れる。

3) 大学生の未来像

事前アンケートでは、「今から、35年後の2050年において、次の項目に関連して、安心・安全は向上していると思いますか、それとも低下していると思いますか」について5段階（5〔向上〕～1〔低下〕）で評価をしてもらっている。

それによれば、最も多く評価された数値に着目すると、人口減少は54.5%が2、医療について63.6%が4となっている。都市は36.4%が4、コミュニティは3と4がそれぞれ45.5%と意見が分かれている。一方、

経済・財政についても2, 3がそれぞれ45.5%、技術発展について54.5%が4、人口知能・ロボットについて4が63.6%である。また、災害について45.5%が4、環境について45.5%が3となっている。

また、評価4と評価5を足した比率をレーダーチャート【図6-2-8】で見ると、高校生と同様、人口問題には悲観的であり、コミュニティや都市の状況について、向上への期待は高いとは言えない。とりわけ経済・財政状況については9.1%しか向上を期待しておらず、将来の発展への期待は低いと言えよう。一方、技術発展については、項目中4, 5を合わせて63.6%（高校生76.2%）となっている。最も高い評価となっているのは医療の81.8%である。人工知能・ロボットについても評価が高い。災害については、54.5%と意見が分かれている（高校生61.9%）。一方、環境については高校生と同様低い数値となっている。高校生と比較すると大学生は、人口減少と経済・財政について、より悲観的である。社会の実態について高校生より現実的な把握ができていく様子が見られる。また、医療については期待が高校生に比べ、15ポイント以上高いのも特徴的である。その背景要因として、学生の専攻分野との関連性も考えられる。まとめると、科学や技術の発展、医療の進歩については、高校生と同様高い評価となっているが、コミュニティの安全・安心の向上への期待は大学生が45.5%、高校生が26.2%と20ポイント近く差がある結果となった。これは、卒業後に社会人として、職場や地域において社会貢献をしていくことを予期的に受け止めている大学生の特徴が現れたと見ることもできよう。

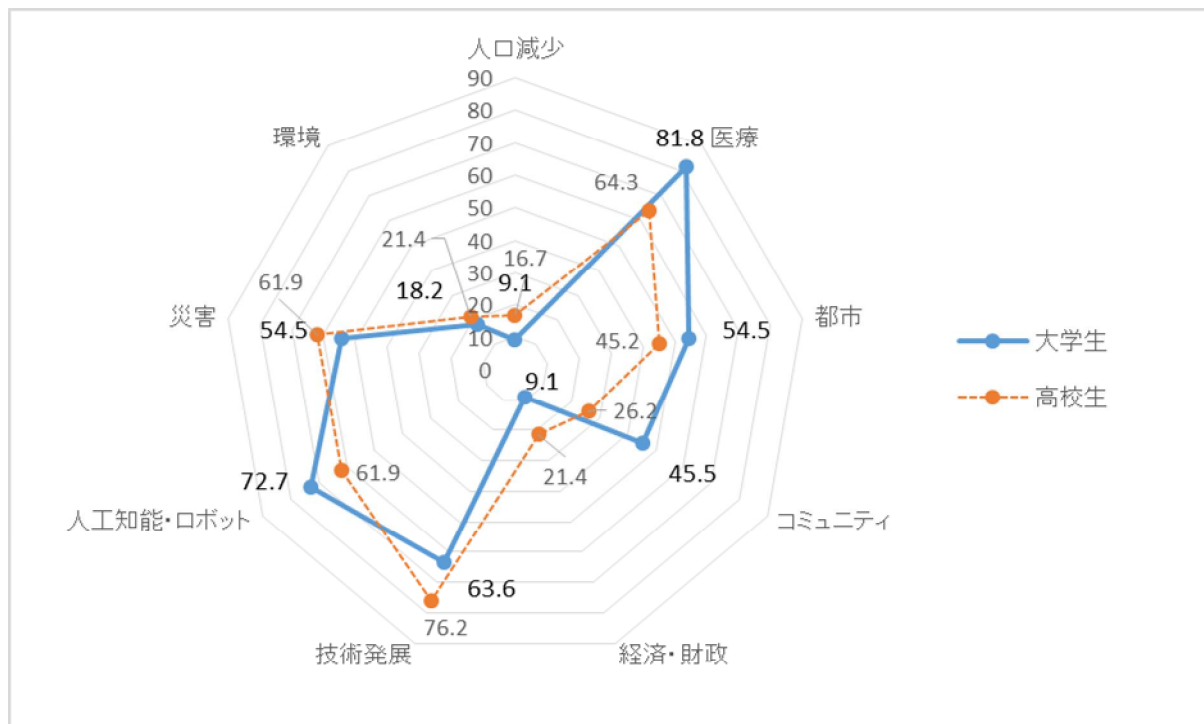


図 6-2-8 2050 年加古川の安心・安全状況についての未来像

(2)「熟議」を通してどのような能力に変化があったのか

1) 自己認識シートにおける事前評価 ～「規律性」「実行力」をもつ大学生の参加～

熟議に参加する大学生（23名）に熟議の前と後で、能力に関する自己評価をしてもらっている。以下の【表6-2-1】を見ると、実施前で自己評価が高い項目は第一位は「規律性」の3.74、次いで「実行力」の3.61、第三位は「自主性」3.57である。過去に遡って同データを見ると、2014年は第一位「規律性」、第二位「会話力」、第三位「自主性」「実行力」、2013年は第一位「規律性」、第二位「自主性」、第三位「会話力」となっている（各年熟議報告書参照）。まとめると、熟議に参加する大学生は、能力項目のうち、「規律性」について自己評価の高い者が参加し、そのほか、「自主性」「実行力」「会話力」に比較的自信があると言える。

学生は毎年、ファシリテーターあるいはワークショップの参加者のどちらかとして熟議に参加する。どちらの役割を担うかは、本人の希望をもとに熟議プロジェクトチーム事務局が調整を行い決定される。これら二つのグループには能力の自己評価において特徴があるだろうか【表6-2-2】。

ファシリテーターグループの第一位は、「実行力」の3.83、次いで「自主性」の3.75、第三位は「規律性」3.58である。一方、ワークショップの参加者グループの第一位は、「規律性」の3.91、次いで「自主性」「実行力」が同値で3.36である。上位3項目は共通しているが、ファシリテーターでは、実行力が規律性よりも高く、ワークショップの参加者はその逆である点が異なっている。ファシリテーターは、テーブルの議論を引き出し、まとめる積極的な態度が求められることから、「実行力」の自己評価が高いことは役割にマッチしていると言えよう。

(注)自己認識シートにおける各「能力」の説明

自主性：物事に進んで取り組む力、**思考力**：問題の要点を把握して、根拠をもとに論理的に考える力、**実行力**：目標に向かって行動する力、**対応力**：状況を判断して関係や流れがうまくいくように行動する力、**交渉力**：人との関わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く力、**会話力**：相手と意思疎通を図る力、**計画力**：現状を把握し、解決に向けて筋道を立てる力、**規律性**：社会のルールや人との約束を守る力、**運営力**：違う立場の人々の集まるチームを適切に運営する力、**貢献性**：社会の担い手として役割を自覚して、参画する力

(以下、事前事後比較表内の二重線は数値の高い方から第一位、第二位、一重線は低い方から第一位、第二位。また、太字は変化率が高い項目、斜字は低い項目である。)

学生全体			
能力項目	2015	2014	2013
自主性	3.57	3.27	<u>3.57</u>
思考力	3.04	<u>2.88</u>	<u>2.93</u>
実行力	<u>3.61</u>	3.27	3.25
対応力	3.17	3.12	3.21
交渉力	<u>2.74</u>	<u>2.64</u>	<u>3.04</u>
会話力	3.22	<u>3.39</u>	3.43
計画力	2.87	2.91	3.32
規律性	<u>3.74</u>	<u>3.42</u>	<u>4.00</u>
運営力	<u>2.78</u>	<u>2.88</u>	3.25
貢献性	2.87	2.94	3.29

表 6-2-1 自己認識評価の経年変化

能力項目	全体	ファシリテーター	ワークショップ学生
自主性	3.57	<u>3.75</u>	3.36
思考力	3.04	3.33	2.73
実行力	<u>3.61</u>	<u>3.83</u>	3.36
対応力	3.17	3.50	2.82
交渉力	2.74	2.83	2.64
会話力	3.22	3.17	3.27
計画力	2.87	2.92	2.82
規律性	<u>3.74</u>	3.58	3.91
運営力	2.78	2.83	2.73
貢献性	2.87	2.92	2.82

表 6-2-2 自己認識評価の役割別比較

2) 自己認識シートにおける事前と事後の変化 ～「運営力」「交渉力」が伸びる～

それでは、事後において自己認識シートでの評価はどのようになっているだろうか。レーダーチャート【図6-2-9】で全体を見ると、どの項目でも能力が伸びたと評価していることがわかる。【表6-2-3】の増減を見ると、第一位は「運営力」の+1.09、第二位は「交渉力」+1.00、第三位は「計画力」+0.78である。「交渉力」は事前評価では最も低い値となっており、低い順から「運営力」、「計画力」・「貢献性」と続いている。すなわち、事前で評価が低かった能力が熟議を経験して伸びたということが出来る。

ファシリテーターとワークショップの参加者で分けて見るとどうであろうか。ファシリテーターでは、第一位は「運営力」の+1.25、次いで「計画力」と「貢献性」が+1.00である【表6-2-4】。一方、ワークショップの参加者では、第一位は「交渉力」の+1.09、次いで「対応力」+1.00と「運営力」+0.91である【表6-2-5】。異なる立場の人々の意見を引き出しまとめる役割を経験したファシリテーターは「運営力」が伸び、ワークショップの参加者は、テーブルでのやりとりから、「人との関わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く力」として「交渉力」の伸びを感じたと解釈できる。

参考までに高校生の結果と比較しておく（p.98【表5-2-1】参照）。高校生で「対応力」が伸びる傾向は大学生のワークショップ参加者と同様であるが、異なる立場の人々とチームワークよく作業や討議を進める「運営力」について手応えは得られていないようだ。一方、「計画力」の変化が大きいのはファシリテーターと同様の傾向である。ファシリテーターのリードする様子や解決に向けて筋道を立てる手法から得たものがあることが推測される。

〈大学生全体〉

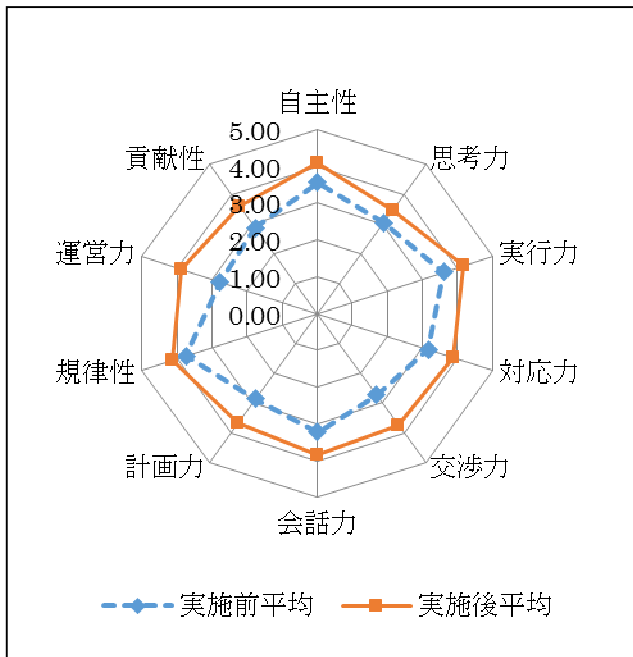


図 6-2-9 事前三後の自己認識の変化

能力項目	実施前 平均	実施後 平均	増減
自主性	3.57	4.09	+0.52
思考力	3.04	<u>3.48</u>	+0.43
実行力	<u>3.61</u>	<u>4.17</u>	+0.57
対応力	3.17	3.87	+0.70
交渉力	<u>2.74</u>	3.74	+1.00
会話力	3.22	3.83	+0.61
計画力	2.87	3.65	+0.78
規律性	<u>3.74</u>	<u>4.13</u>	+0.39
運営力	<u>2.78</u>	3.87	+1.09
貢献性	2.87	<u>3.61</u>	+0.74

表 6-2-3 事前三後の自己認識の変化

〈ファシリテーター〉

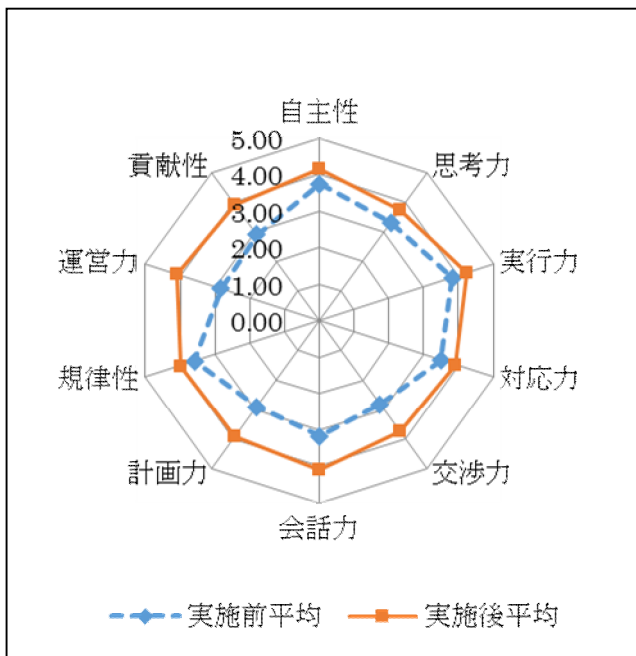


図 6-2-10 事前三後の自己認識の変化

能力項目	実施前 平均	実施後 平均	増減
自主性	<u>3.75</u>	<u>4.17</u>	+0.42
思考力	3.33	<u>3.75</u>	+0.42
実行力	<u>3.83</u>	<u>4.25</u>	+0.42
対応力	3.50	3.92	+0.42
交渉力	<u>2.83</u>	<u>3.75</u>	+0.92
会話力	3.17	4.08	+0.92
計画力	2.92	3.92	+1.00
規律性	3.58	4.00	+0.42
運営力	<u>2.83</u>	4.08	+1.25
貢献性	2.92	3.92	+1.00

表 6-2-4 事前三後の自己認識の変化

〈ワークショップ参加学生〉

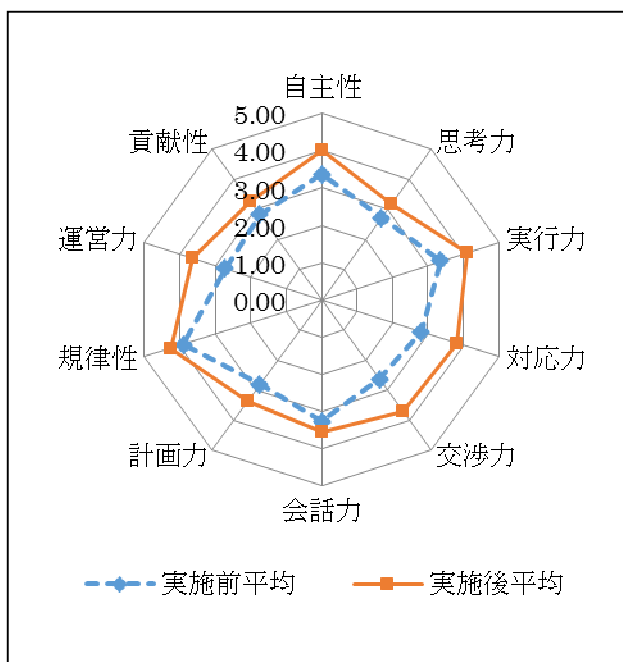


図 6-2-11 事前事後の自己認識の変化

能力項目	実施前平均	実施後平均	増減
自主性	<u>3.36</u>	4.00	+0.64
思考力	<u>2.73</u>	<u>3.18</u>	+0.45
実行力	<u>3.36</u>	<u>4.09</u>	+0.73
対応力	2.82	3.82	+1.00
交渉力	<u>2.64</u>	3.73	+1.09
会話力	3.27	3.55	+0.27
計画力	2.82	3.36	+0.55
規律性	<u>3.91</u>	<u>4.27</u>	+0.36
運営力	<u>2.73</u>	3.64	+0.91
貢献性	2.82	<u>3.27</u>	+0.45

表 6-2-5 事前事後の自己認識の変化

3. 大学生は「地域の安全・安心」についてどう考えたか

本節では、熟議参加が決まり、熟議の事前準備としての「熟慮」の時期に行う「事前アンケート」と熟議当日の議論を終え、「熟議」すべてを経験した後に行う「事後アンケート」の比較を行う。「熟議」という経験を通して、熟議への構え、テーマに対する意見がどのように変化したのかを考察する。「協働を目指す対話」である熟議の成果が、学生の中にどのように現れているか、教育的効果の観点から見ていくことが目的である。

なお、データを事前事後で比較することから、参加者のうち事前および事後のアンケートの両方に回答した大学生のみを対象とする。

(1) 「熟議」への期待 ～「議論の段階」における期待と成果～

大学生が「地域の安全・安心」についてどう考えたのかを見るまえに、「議論の段階」に対する期待が、実際に熟議を通して変化したのかどうかを確認しておく。最も大きく変化したのは、「他の人の意見を聞く」27.3ポイントの減少である。その一方で、「多くの人と交流したり話をする」と「自分の意見を述べる」がそれぞれ18.2ポイント増加している。議論の段階では、実際に聞くというよりは自分の意見を述べ、他の人と意見を交換し、交流することを行った経験がそのまま数値に表れていると言える【図6-3-1】。

高校生では、「自分の意見を述べる」は22.3ポイント増加しているが、「他の人の意見を聞く」については事前事後であまり変化がみられなかった（P.101【図5-3-1】参照）。また、大学生と異なり「多くの人と交流したり話をする」は減少している。大学生に比べ、高校生は大人の間で緊張していたこと、他の人との交流を行う余裕がなかったことも予想される。大学生は、高校生に比べ議論の手法としてのワークショップからもある程度の成果を上げられたことが読み取れる。

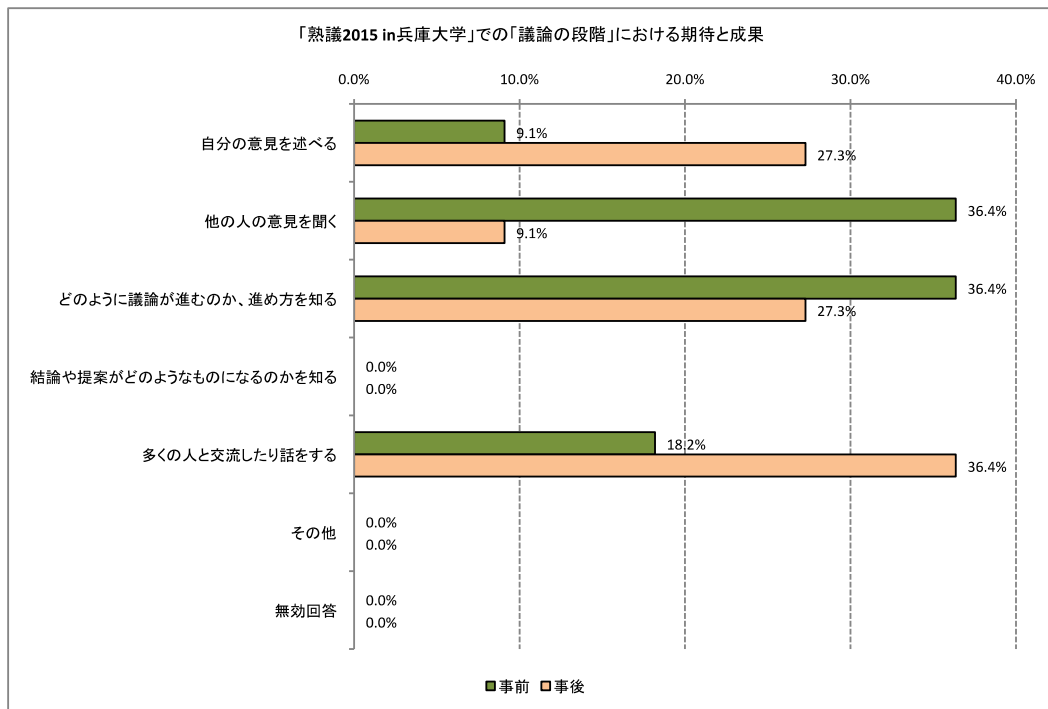


図 6-3-1 「熟議 2015 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待と成果

(2) 「地域の安全・安心」に関する意見の変化 ～熟議前と熟議後～

今年のテーマは「加古川地域のちから ～安心・安全を創る～」に関わり、10項目のサブテーマを設定した。以下では、それらについての意見が熟議前と熟議後でどのように変化したのか見ていく。

10項目それぞれについて、賛成か反対かをたずねた結果を検討し、さいごにこれらの項目を全体として考察する。なお、選択肢の5段階尺度のうち、「大いに賛成」と「やや賛成」の合計を「肯定派」とし、「大いに反対」と「やや反対」の合計を「否定派」として分析に用いる。

1) 項目別の変化

① 「人と人との繋がりが強いほど、安心・安全を創ることに役立つ」

「大いに賛成」が事前では27.3%であったが、事後には81.8%に増加した【図6-3-2】。この増加率は高校生より高いが傾向は同じである。熟議でのテーブルで意見交換を行う体験それ自体を通して、人々のつながりの重要性を実感したと思われる。

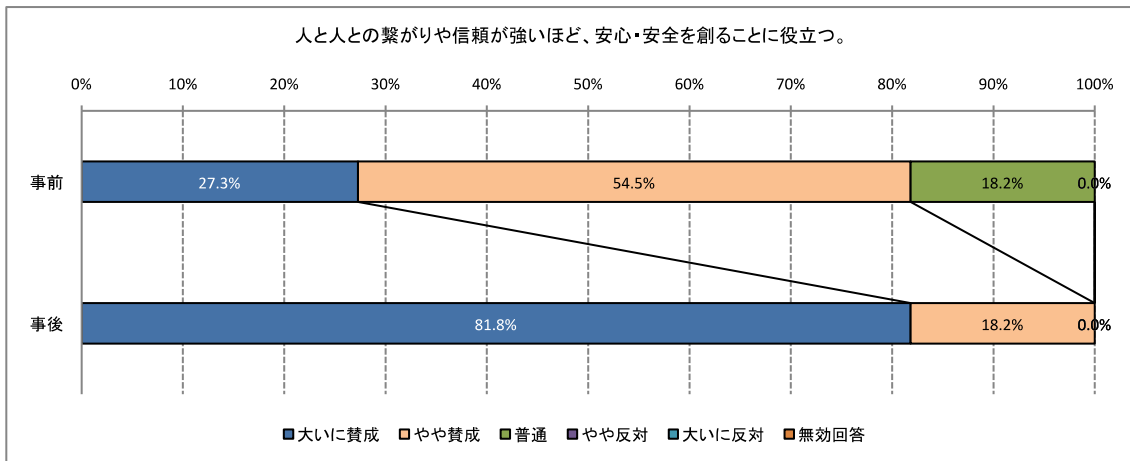


図 6-3-2 人と人の繋がりがや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ

②「安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である」

事前では、「大いに賛成」が18.2%であったが事後には72.7%へと大幅に増加した。この項目についても高校生よりも増加率が高い。事前学習や「議論の段階」の経験により、地域の課題解決のために熟議の必要性や重要性を認識した様子が見られる【図6-3-3】。

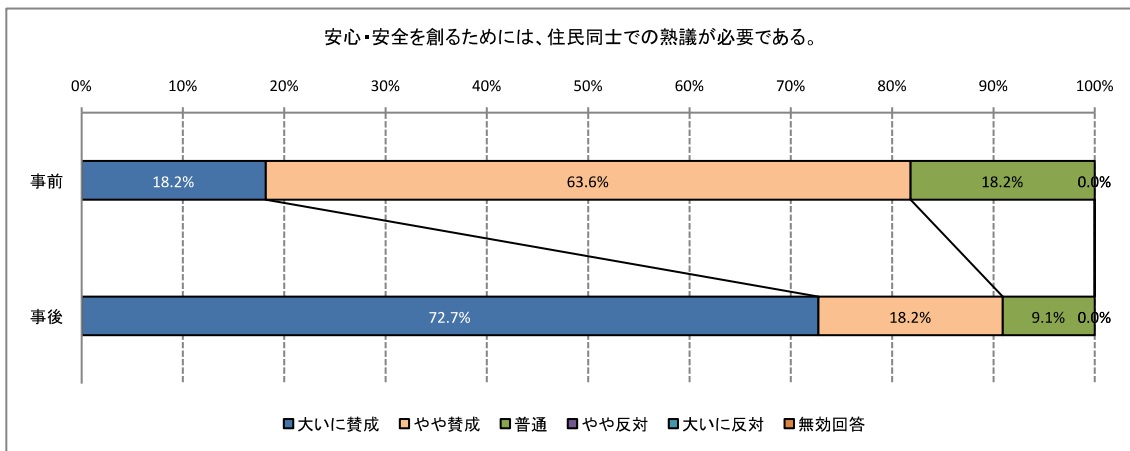


図 6-3-3 安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である

③「安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている」

事前では、「大いに賛成」「やや賛成」の「肯定派」は9.1%であり、高校生に比べて、熟議前から住民の役割を限定的に考えない志向は大学生で高かった。しかし、事後では、「肯定派」は9.1%であり36.4%と27.3ポイントも伸びている。一方、「住民の役割は限定されていない」と考える「否定派」は、18.2ポイント減少している。議論を通して、大学生は「住民の役割」の限界性についても考える機会となったことがうかがわれる【図6-3-4】。

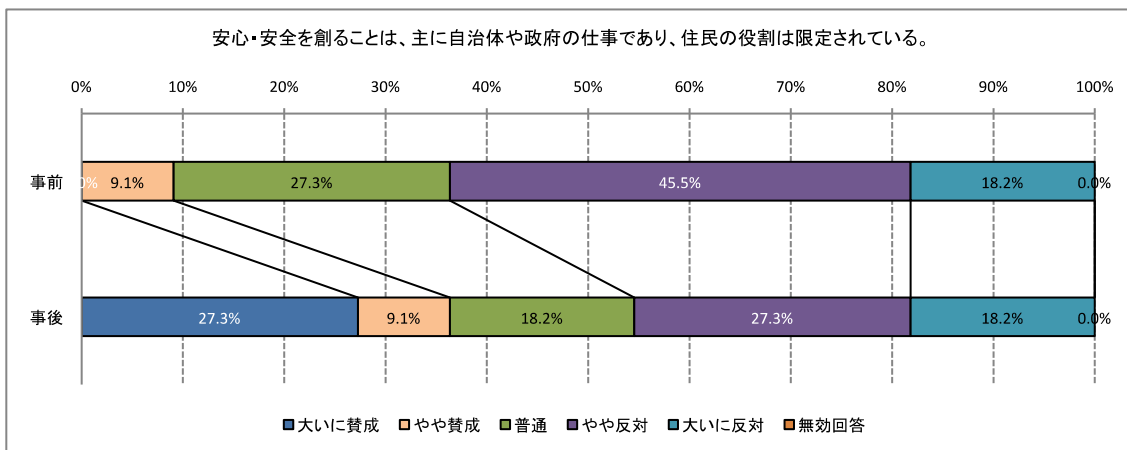


図 6-3-4 安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている

④ 「他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である」

「肯定派」は事前の27.3%から63.6%へと35ポイント以上増加している。高校生では減少したことで対照的である。一方、「否定派」は36.4%から0.0%へと大幅に減少した。安心・安全を創ることの議論において、「一人ひとりの能力の向上」が重要との認識が高まったことがうかがわれる。どちらかといえば、ネットワークの力、協働の力の必要性について印象が強かった高校生とは異なる傾向が見られる。

【図6-3-5】。

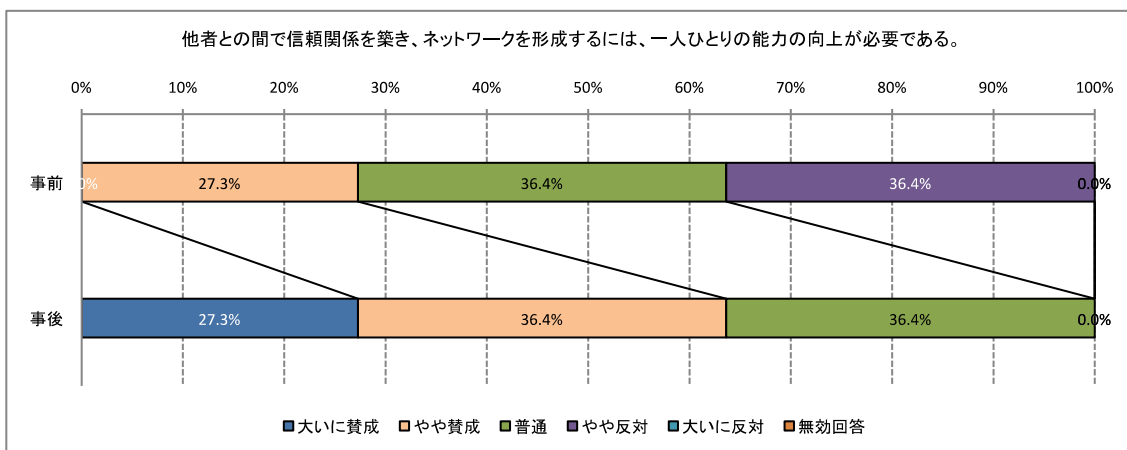


図 6-3-5 他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である。

⑤ 「安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい」

「肯定派」は事前の27.3%から54.5%へと30ポイント近く増加している。「ひと」の協力だけでなく、「もの」の必要性についての気づきがこの数値に表れていると読むことができよう。本項目について、肯定派は高校生が大学生より15ポイント近く低い数値となっている【図6-3-6】。

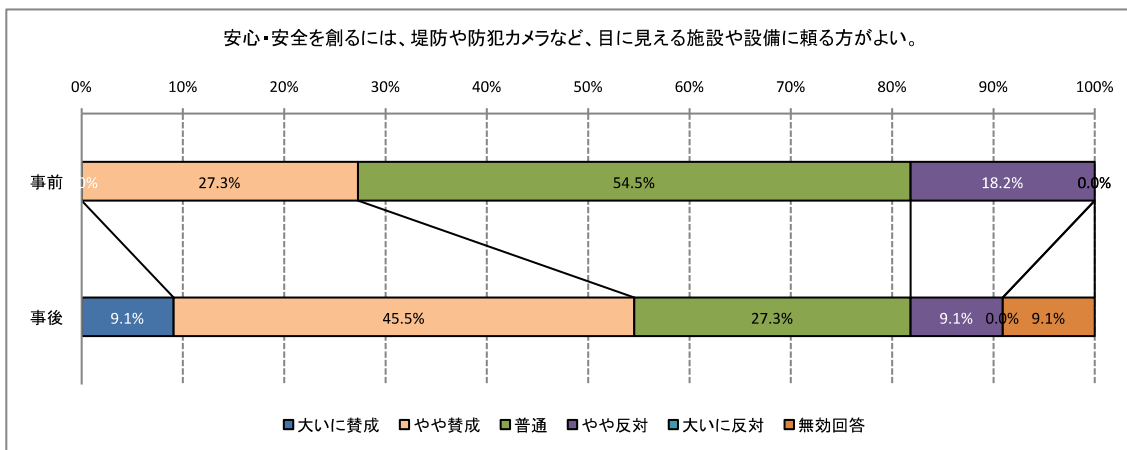


図 6-3-6 安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい。

⑥ 「コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている」

「大いに賛成」は9.1%から63.6%へと大幅に増加している。高校生の増加19.4ポイントに比べ54.5ポイントも変化している。事後では、「やや賛成」と合わせると「肯定派」は90%近くがコミュニティでの日常的な活動の重要性を感じていることが分かる【図6-3-7】。

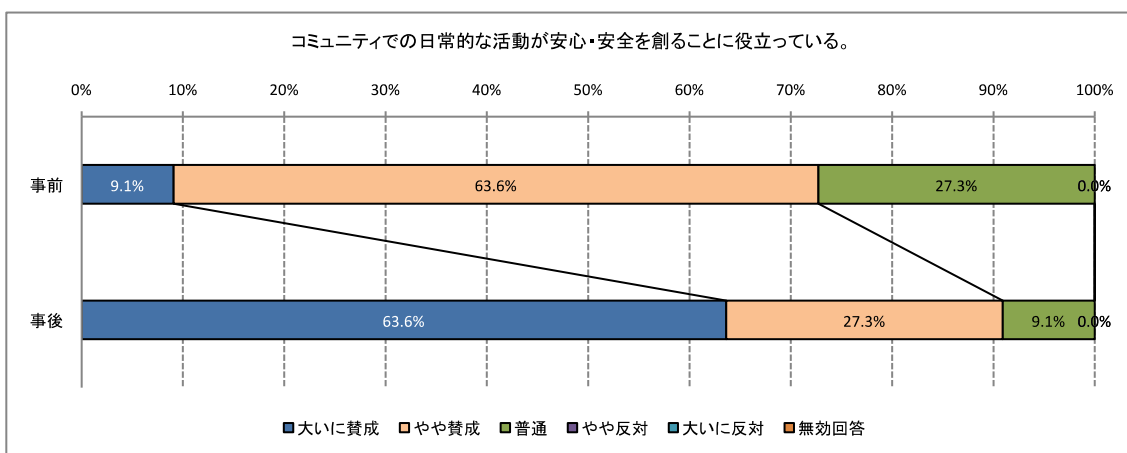


図 6-3-7 コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている。

⑦ 「行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる」

「大いに賛成」は事前でも36.4%（高校生61.1%）であるが、事後では54.5%へと増加している。事後では、「やや賛成」と合わせると「肯定派」は100%に上っており、住民同士の助け合いの必要性が十分に理解されていることが分かる【図6-3-8】。

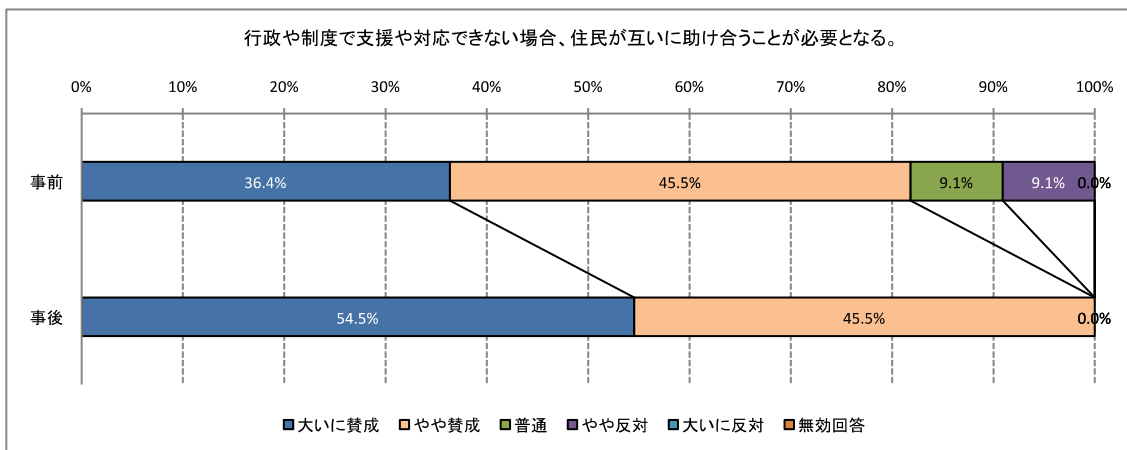


図 6-3-8 行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる。

⑧「安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない」

「肯定派」は事前の9.1%から事後の27.3%へと15ポイント近く増加している。これは高校生とほぼ同じ傾向である。一方、「否定派」は事前の54.5%から事後の27.3%へと25ポイント近く減少している。議論を経て、不便があっても安心・安全のためには致し方ないという認識が高まったことが分かる【図 6-3-9】。

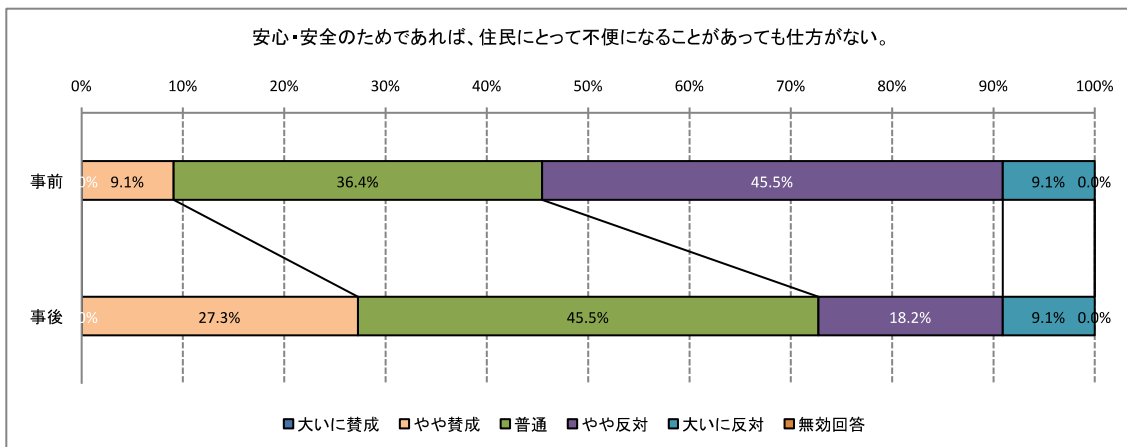


図 6-3-9 安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない。

⑨「安心・安全を創るのは、地の人役割であり、風の人に関わらないものである」

「肯定派」は事前の0.0%から事後の18.2%へと増加している。一方、「否定派」は事前の81.8%から事後の63.6%へと約20ポイント減少しているものの、安心・安全を創るとき「地の人」も「風の人」も関係がないとの認識が多数派であることが分かる【図6-3-10】。

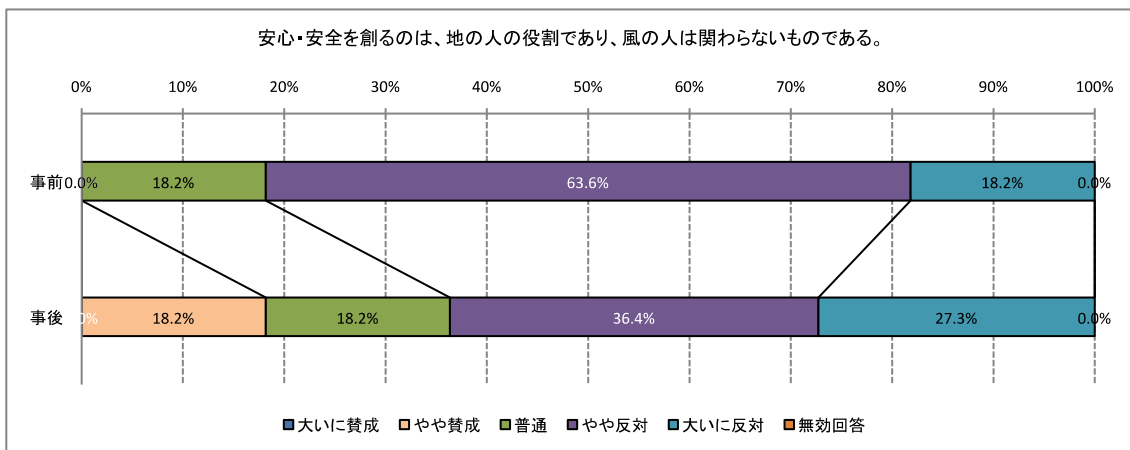


図 6-3-10 安心・安全を創るのは、地の人の役割であり、風の人は関わらないものである。

⑩「大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある」

「大いに賛成」が9.1%から54.5%へと大幅に増加している。また、「肯定派」で見ると、事前の81.8%から事後の90.9%へと約10ポイント増加している。高校生の肯定派が、事後も50%に満たないことと比べると、大学生は大学が「安全・安心」のために果たすべき役割があると考えており、認識の開きが明確に表れている【図6-3-11】。高校生にとっては、高等教育機関としての大学のイメージがまだ掴みきれていないということが予測できる。

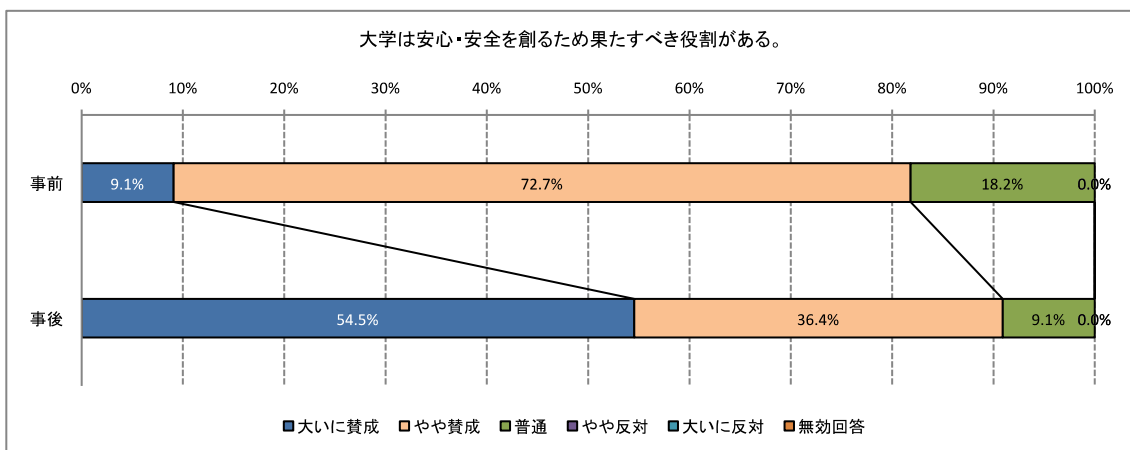


図 6-3-11 大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある

2) 全体の考察

【図6-3-12】は、上で個別に考察した10項目について、「大いに賛成」を5、「やや賛成」を4、「普通」を3、「やや反対」を2、「反対」を1として平均を算出したものである。地域の安心・安全についての考え方について、熟議の前と後で目立った変化がみられるのは、「他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である」(+1.0)。次いで、「人と人との

繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ」「安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている」が+0.73の変化が見られる。地域の安心・安全については、個々人の能力向上が必要であると同時に人と人の繋がりも重要であるが、自治体や政府の役割にも期待していることが伺われる。

一方、熟議の経験を通して、高校生の中なかで起こった最も大きな変化は地域の安心・安全のためには、「住民同士の熟議の必要性であること」について認識が高まったことである。また、コミュニティでの日常的な活動の重要性を感じるとともに、安心・安全のためには住民に不便になることを受け入れなければならないといった、「コミュニティの一員としての責任感」の必要性を再認識している（p.107【図5-3-12】参照）。全体として、大学生と高校生では、異なる変化が見られる。大学生の方が、視野がより広く、柔軟かつ多面的に事象を捉えられているということができよう。

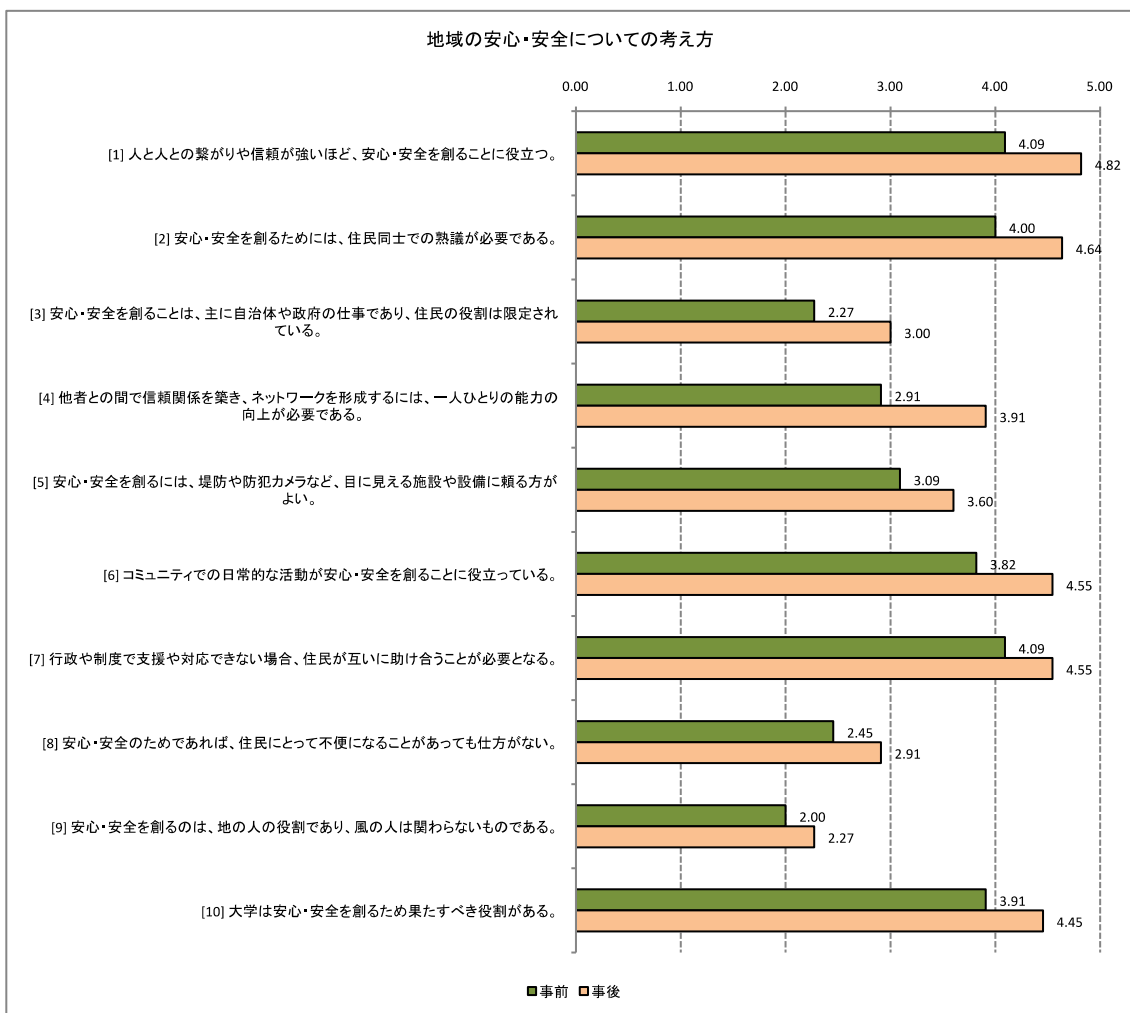


図 6-3-12 地域の安心・安全についての考え方（ポイント）

4. 大学生は「熟議」をどのように経験し、どう活かすのか

本節では、事後アンケートから、参加した大学生が熟議を通して学んだこと、経験したことを今後どう活かそうと考えているのかをみていく。

(1) 「熟議」の満足度

満足度は、「とても満足」が90.9%と高校生の80.6%より10ポイント高くなっており、全体として非常に高い。「まあ満足」の9.1%を合わせると、大学生全員が熟議の一連の経験と学びを充実感を持って捉えていることが分かる【図6-4-1】。

地域の人々や高校生との交流、テーマにしたがって課題を抽出するといった討議方法など、大学の正課授業では得られない体験から得たものが大きい様子が見られる。

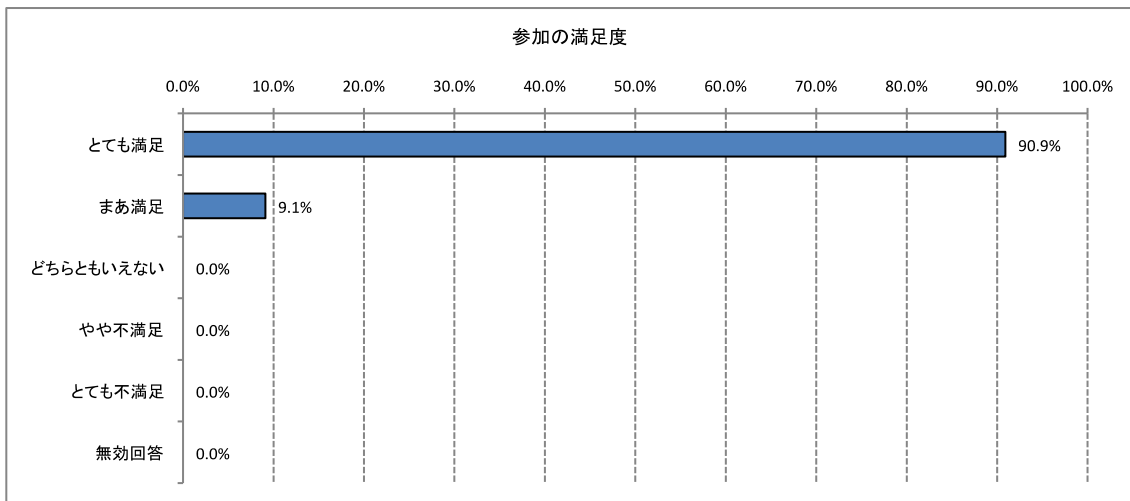


図 6-4-1 参加の満足度

(2) 「熟議」経験の活用

それでは、大学生はこの経験を今後の生活や学びに活かしていくことを考えているのだろうか。【図6-4-2】で、「熟議の経験を今後の活動で活かしたいか」について、「積極的に活かしたい」が63.6%と高校生の47.2%に比べて、15ポイント近く多い。「機会があれば是非活かしたい」についても36.4%となっており、合わせると100%となることから、熟議の成果を次につなげようとする大学生の強い意欲が感じられる。

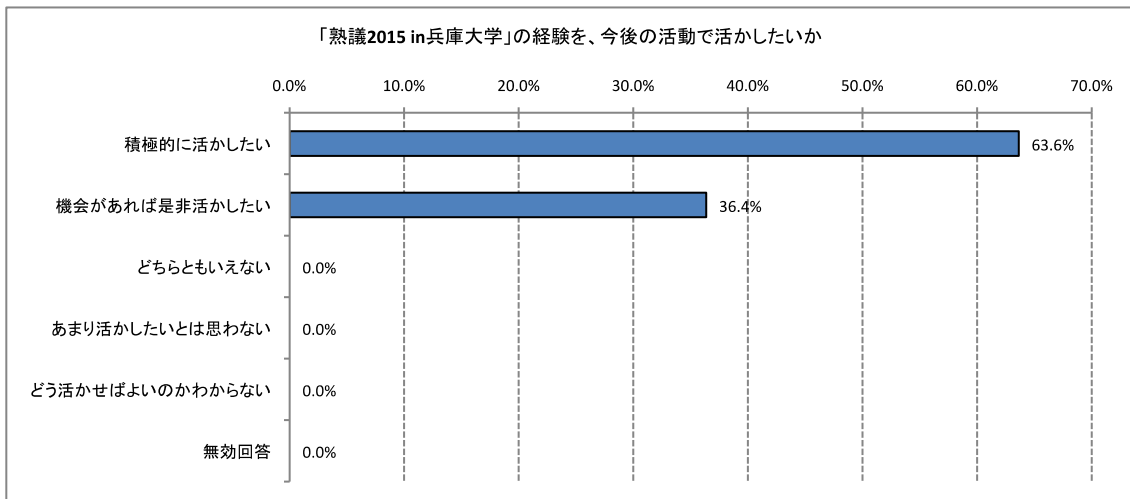


図 6-4-2 「熟議 2015 in 兵庫大学」の経験を、今後の活動で活かしたいか

(3) 「熟慮の段階」に関する意見

ここでは、大学生が熟議で経験したことのなかでも、とくに熟議の討議形態に焦点を当て、大学生が何を感じたのかについて見ていく。

熟議は地域の課題の抽出、共有、深化といったプロセスにおいて協働し、地域づくりやネットワークづくりにつなげていくことをめざしている。地域の人材を育成する兵庫大学において、学生がこのような熟議の経験を専門教育における学びに活かすだけでなく、地域の課題解決のための手法として身につけることは今後も多いに推進されるべきであろう。また、熟議での経験が今後の学生の行動にどのように影響を与えるかについても追跡的に把握していく必要がある。

① 「熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった」

まず、「熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった」について5段階評価でたずねた。結果は、「非常に思う」が72.7%と高校生の33.3%をはるかに上回っている。「思う」が27.3%を合わせると、全員にとって「熟慮の段階」が議論の段階の準備として効果があったことを示している【図6-4-3】。

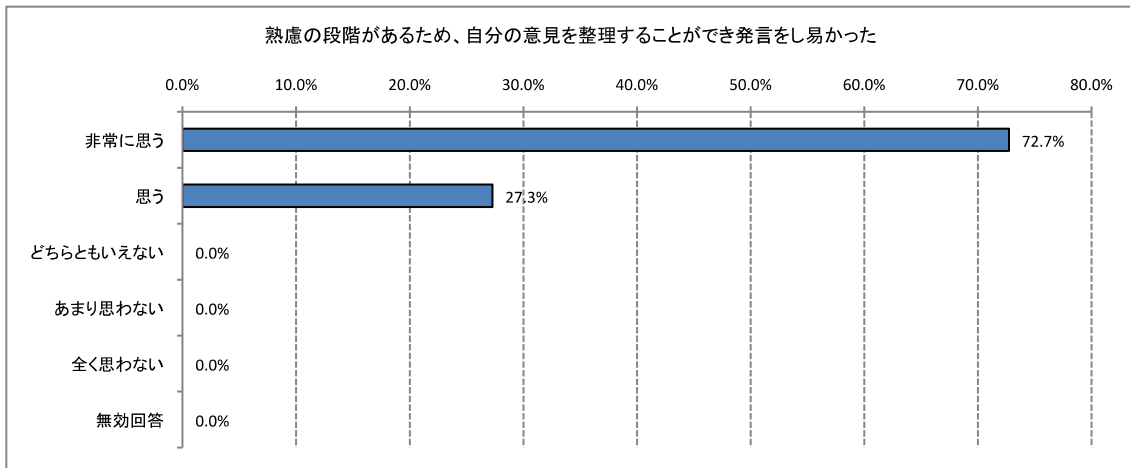


図 6-4-3 熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった

②「熟慮の段階があるため、他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった」

それでは、熟慮の段階があることによる「他の人の意見についての理解」への影響はどうであっただろうか。「非常に思う」が45.5%、「思う」が45.5%と、合計では90.9%が熟慮の段階の重要性を実感する結果となっている【図6-4-4】。

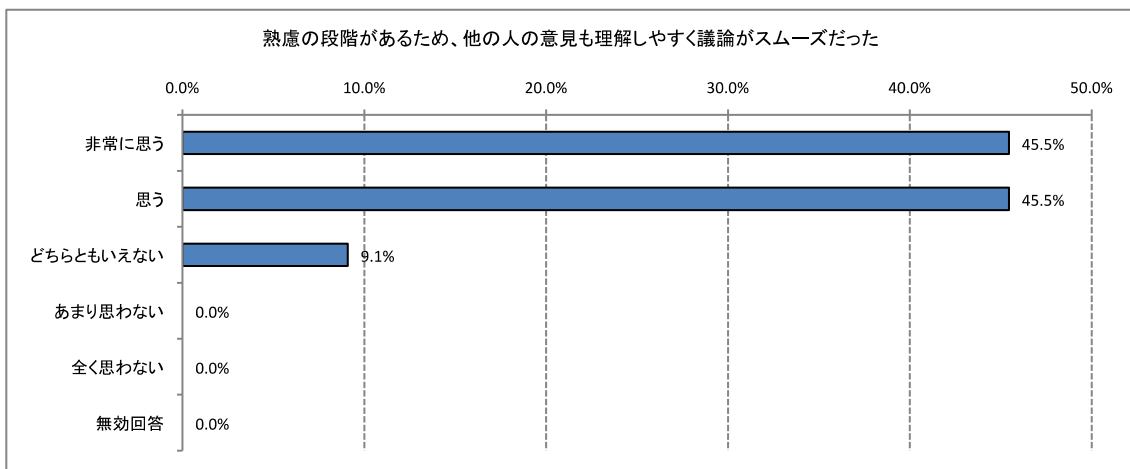


図 6-4-4 熟慮の段階があるため、他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった

③「これまで経験してきた話し合いなどよりも、共通の基盤に立っての議論ができた」

熟慮の段階により、当日の議論を促進するために十分な「共通の基盤」ができていたか。これについては、「非常に思う」が54.5%、「思う」が45.5%となっている【図6-4-5】。合わせると大学生全員が話し合いのため共通の基盤ができていたと感じている。熟慮の段階として、事前アンケートが意見集約のツールとしてだけでなく、地域をめぐるテーマの範囲や方向性についての情報を確認したり、共有したりすることに役立っていることが予想される。また、ウェブ上で、共通の学習資料により、議論で必要となる用語表現や定義を学んだことの影響も見て取れる。

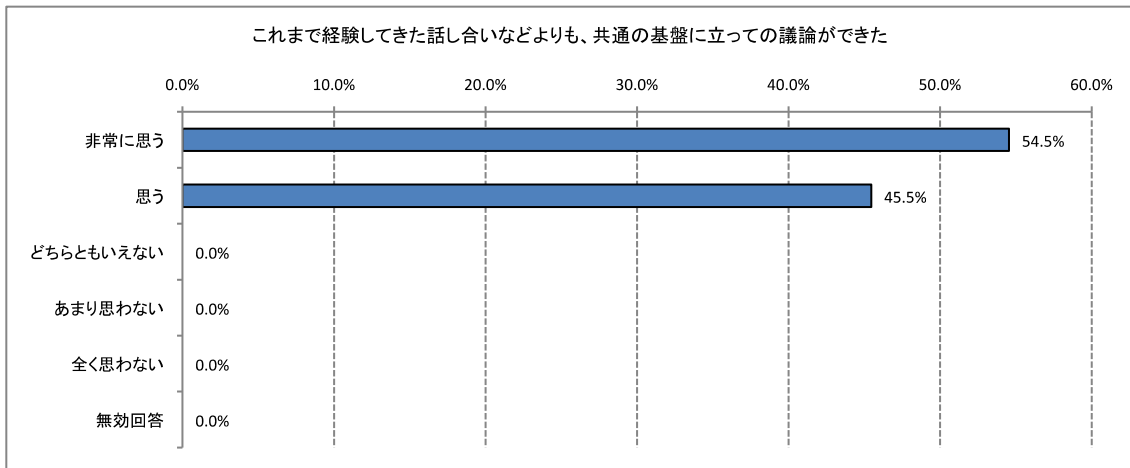


図 6-4-5 これまで経験してきた話し合いなどよりも、共通の基盤に立っての議論ができた

④「熟議を通して、テーマ（加古川地域のちから）について、興味や関心がより高まった」

つぎに、「加古川地域のちから」というテーマそのものについて、大学生がより関心を持つ機会となったのかどうかについてたずねた。「非常に思う」が63.6%と高校生の44.4%を20ポイント近く上回っている【図6-4-6】。「思う」の36.4%と合わせると全ての大学生が、「地域の課題とはなにか」「地域をどうしたらよいのか」といったテーマにより関心が高まったことが分かる。

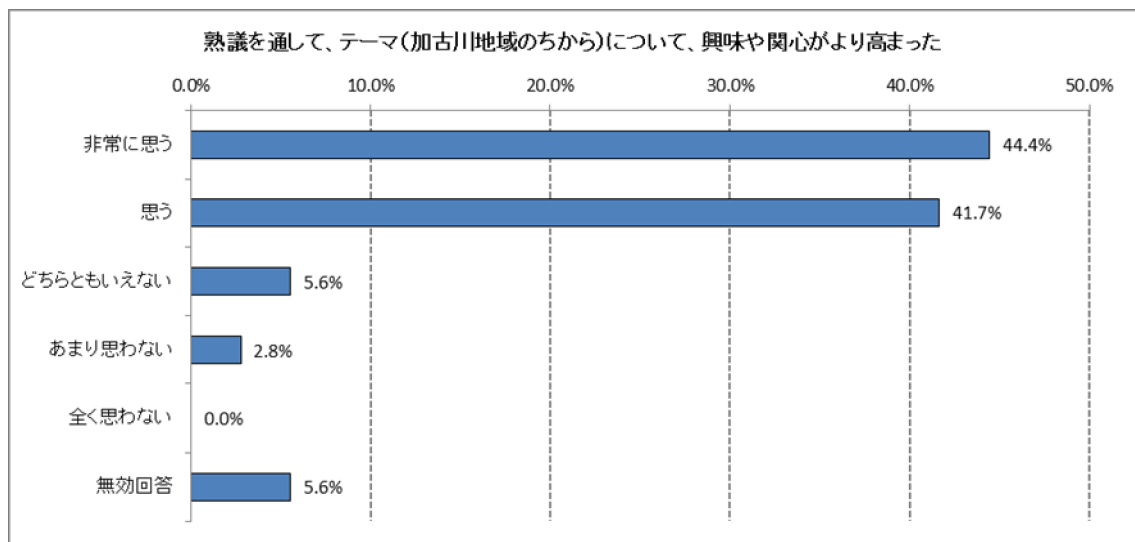


図 6-4-6 熟議を通して、テーマ（加古川地域のちから）について、興味や関心がより高まった

(4)「議論の段階」が促進する大学生の自己変化

それでは、熟議のプロセスのうち、実際の討議により多様な人々と意見を交わし、協働しながら課題に取り組む「議論の段階」は、大学生にどのような影響を与えたのだろうか。

①「議論の内容が充実しテーマに関する自分自身の知識などを深める機会になった」

熟議に参加したことにより、テーマに関する知識を深める機会となったかについてたずねた。「非常に思う」が63.6%、「思う」が27.3%となっている【図6-4-7】。合わせると90%を超える大学生が、「地域のちから」に関する知識を深めたとしている。実際に議論をするなかで、安心・安全にも災害や事故だけでなく、食品や環境など幅広い領域があること、また、安心度・安全度を高めていくためにはさまざまな課題があることなどについて、しだいに理解が深められて行ったと思われる。

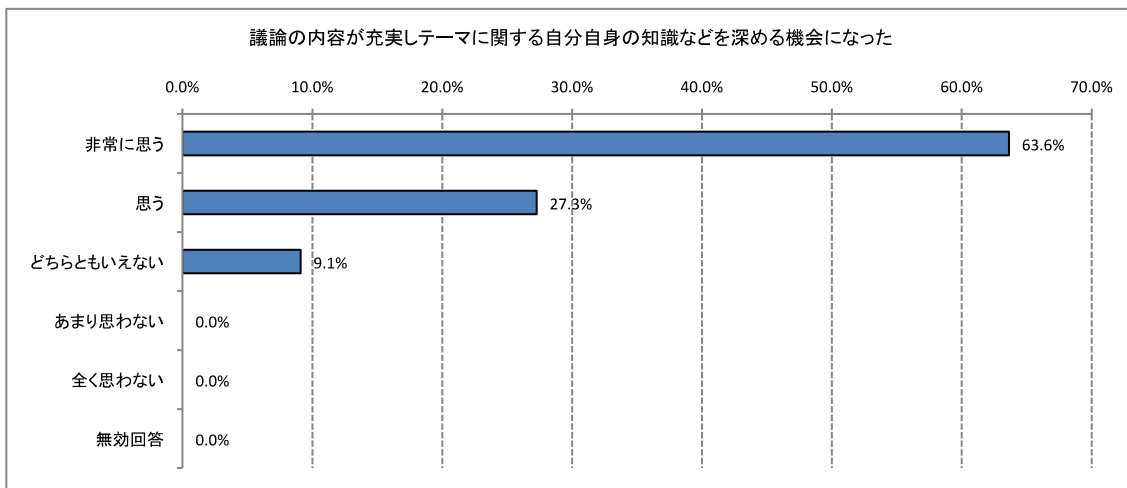


図 6-4-7 議論の内容が充実しテーマに関する自分自身の知識などを深める機会になった

②「課題の解決に向けて、自ら実行することがより重要であるとの考えを持った」

つぎに、熟議に参加したことが、単に交流や討議それ自体を目的とするにとどまらず、地域の課題解決に向けて「自ら実行することの重要性」の気づきにつながっているかどうかについてたずねた。「非常に思う」が54.5%、「思う」が45.5%となっている【図6-4-8】。合わせると全ての大学生が、課題についての知識を深めるだけでなく、自ら実行していくことの重要性を自覚していることがわかる。この結果は、他者との議論、協働によって導かれ生み出された協働の成果ということができよう。

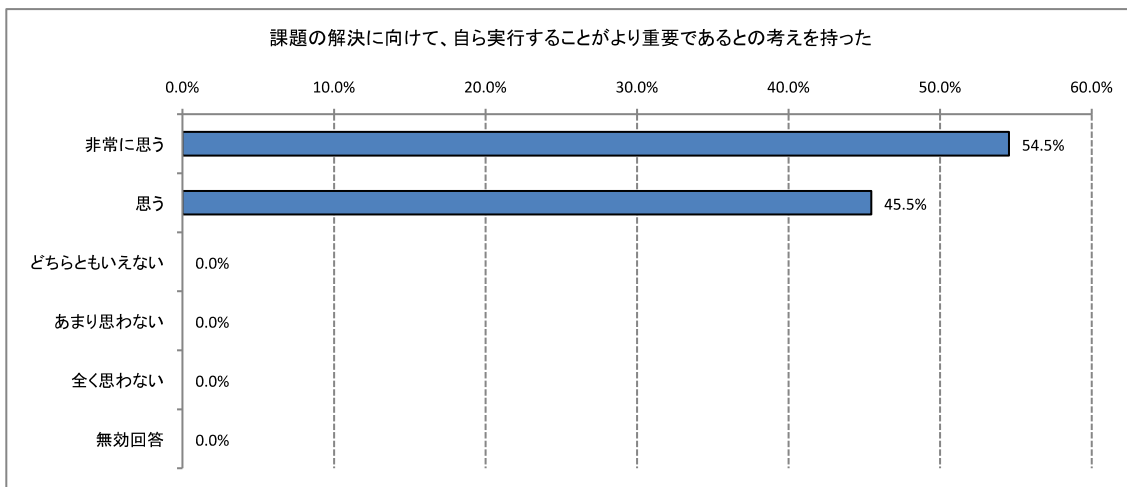


図 6-4-8 課題の解決に向けて、自ら実行することがより重要であるとの考えを持った

③「最初に自分が持っていた意見について変化をもたらすことになった」

さいごに、議論の段階の影響について、「最初に持っていた自分の意見が変化したか」尋ねた。「非常に思う」が45.5%と高校生の33.3%より12ポイント多い。また、「思う」が36.4%となっている【図6-4-9】。合わせると80%を超える大学生が、議論を経て、はじめに持っていた自分の意見に何らかの影響があったとしている。

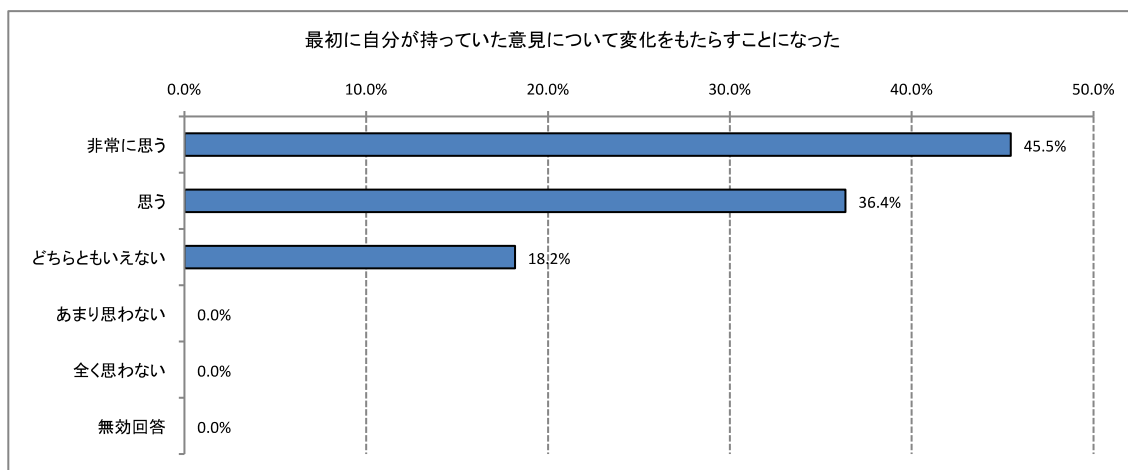


図 6-4-9 最初に自分が持っていた意見について変化をもたらすことになった

(5)「議論の段階」の成果

ここまで、大学生が熟議で経験したことのなかでも、とくに「議論の段階」について、知識を得て考え方が変化したり、行動することの大切さについての自覚が高まった様子を見てきた。それでは、大学生は具体的にどのような成果があったと感じているのだろうか。その他を含めて6項目について最も近いものを一つだけ選択してもらった【図6-4-10】。

その結果、最も多かったのは、「多くの人と交流することや話をする事ができた」が36.4%、「自分の意見を述べる事ができた」「どのように議論を進めるのか、理解することができた」がそれぞれ27.3%となっており、成果の実感は分散している。ワークショップに参加した大学生はそれぞれの期待に応じて成果を確認したと思われるがどのようになっているのだろうか。

事前の回答と事後の回答を照合してみると、事前に「他の人の意見をきくこと」への期待が大きかった者が、事後では「多くの人と交流することや話をする事」ができたことを成果として挙げている。また、事前に「どのように議論が進むのか、進め方を知る期待が大きい」とした者の多くが、「どのように議論を進めるのか、理解することができた」としている。その意味では期待通りであった者が11人中7人（63.6%）を占める結果となっている。

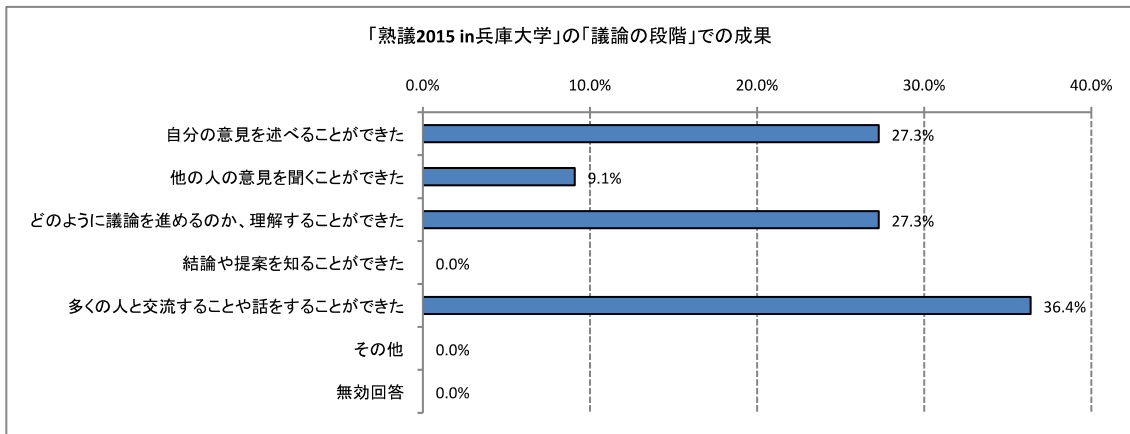


図6-4-10 「熟議2015 in兵庫大学」の「議論の段階」での成果

5. 「熟議」終了後のふり返りグループワークから

熟議が終わると、参加した大学生は振り返りのためのグループワークを行う。本節では、ファシリテーター12名とワークショップ参加者11名に分けて、グループワーク後に書かれた自由記述を対象とし分析する。話し合いの内容は、「意見を大いに出し合い、話したいことを全て話すことができたか」と「参加したメリット」についてである。以下では、それぞれについて、ファシリテーターとワークショップ参加者に分けてまとめる。

(1) テーブルでの議論について

① ファシリテーター

今回のファシリテーターは経験者が2名であり、はじめてファシリテーターを担当した者がほとんどである。しかし、全体として、下記の記述のまとめに見られるように、ある程度ファシリテーターの役割を果たせたという者が多い。また、どのようにしてそれができたのかを自己分析し、「表情や態度に気をつけ、話しやすい雰囲気作りや環境を整えることが大事だった」としている。一方、異なる年代の人々が集うテーブルで偏らずに意見を出してもらうことの難しさを感じている様子が見られる。

今後は、ワークショップの手法を大学生活、社会生活に役立てたいとする者もある。

〈ファシリテーターの役割・能力〉

- ・ 意見を出しやすい環境を整える、意見に共感する態度が必要
- ・ 意見を出してもらうために発言者の表情、態度を見ながら進める
- ・ 一人ひとりに視線を向けるよう努力した
- ・ 楽しい雰囲気を出すことはできた

- ・参加者へ疑問や意見などの返しをできた
- ・相手の意見をしっかりと聞きながらも、相手へ意見を返す技術が必要

〈上手くいかなかった点など〉

- ・参加者の他者の意見を聞く姿勢に助けられた
- ・議論を繋ぐことができなかつたことも多い
- ・高校生は遠慮している様子だった
- ・中高年の方の話に引き込まれてしまうこともあり、うまくファシリテートできないこともあった
- ・限られた時間で全員が納得のできる議論をするのはむずかしいと感じた

〈今後活かす〉

- ・ワークショップの手法は大学生活、社会生活に役立てたい

②ワークショップ参加者

ワークショップ参加者のほとんどが、他の人とのコミュニケーションや交流がうまく行き、意見を出すことができ、他者の意見も聴くこともできたとしている。また、テーブルのメンバーが雰囲気作りに協力し、話しやすい環境を作ることができていたとしている。全体として、議論の進め方に満足できている様子がうかがわれる。

〈意見を出すこと・他者の意見を聴くこと〉

- ・最初は緊張したが、だんだん意見を言えるようになった
- ・他の人の意見に耳を傾け、参考にすることができた
- ・様々な年齢の人と交流できて有意義だった
- ・いろいろな世代の方が意見を出すなかで、雰囲気もよくなかって意見が出しやすかった
- ・グループ全員がそれぞれの意見にうなずき、話しやすい環境を作ることができていた
- ・自分の意見を出すだけでなく、他の人の意見を聞き、それについての考えも発信できた

〈今後活かす〉

- ・このような行事に参加し、場数を踏むことで、積極的に意見を言えるようになると思う

(2) 参加したメリットについて

①ファシリテーター

ファシリテーターでは、様々な世代、職業・立場の人々の多様な価値観に触れることができ、学ぶことが多かったという感想が最も多い。また、テーブルの参加メンバーに配慮しながら、意見を引き出し、まとめる役割の大切さ・難しさを感じたが、一方で、人と話すことの楽しさも実感したようだ。

〈学び・気づき〉

- ・様々な世代の価値観に触れることができ、学ぶことが多かった
- ・年齢層や職業、立場のちがいによる意見の違いを経験できた
- ・意見を引き出しまとめる役割の難しさを感じ、今後のためになると思った
- ・周りの人への配慮の仕方などを学ぶ良い機会となった
- ・話し合いの場での時間管理の重要性を知ることができた
- ・人と話すことの楽しさ、大切さを実感した
- ・熟議は年齢とは関係なく、出された意見をきちんとまとめることが大切と学んだ

②ワークショップ参加者

各テーブルで議論を行った大学生は、参加したメリットとして、まず、自分自身の意見をしっかり言える機会となったことを挙げている。また、ファシリテーターと同様、世代や立場によって異なる考え・意見を聞いて、価値観の多様性を知ったとしている。熟慮の段階、議論の段階を通して、他者の意見も聴きながら、自分のなかの意見を引き出すことができ、考えを深められるとともに、これらのプロセスにより新しい価値観も持つこともできるとする意見も見られる。

〈知ったこと・気づき〉

- ・加古川の良いところも悪いところもよくわかった
- ・人前で話すことが苦手だったが、長時間テーブルを共にするなかで話せるようになった
- ・世代や立場によって異なる考え・意見を聞いて、価値観の多様性を知った
- ・これまで教育や地域のことなどについて、疑問に思っていたことを発言できた
- ・意思の共有ができたことが大事である
- ・自分だけの考えだと思っていたら、他の人も同じような考えをもっていて共有できたことがよかった

〈意見の共有からの学び〉

- ・自分のなかの意見を引き出すきっかけになった。そこから、考えを深めることが今後の課題と考えた
- ・他人の意見を聴くことで、自分のもっている考えを確認でき、新しい価値観をもつことができた
- ・結果よりもプロセスを大切にするワークショップから得た学びを今後活かしたい
- ・自分の意見や出された意見をまとめる力がついた
- ・相手に配慮した言い方を身につけられたので、思い切って自分の発言もできた

6. まとめ ～「熟議」の経験とその効果～

本章では、「熟慮の段階」「議論の段階」の前後に行った自己認識シートおよび事前事後アンケート、熟議終了後の事後研修の内容をもとに、熟議が大学生に与える影響について見てきた。本節では、これまでの分析を総括する。

(1) 熟議の方法の理解と未来像

まず、変化や効果などの影響を見る前に、どのような大学生が参加したのか把握する必要がある。議論に参加した大学生は、全員が「熟議」という言葉を今回の参加で始めて聞き、大学の教員に勧められて参加した者が約80%を占めている。

しかし、事前アンケートでは、ホームページの学習資料等を通じて、熟議の進め方やテーマについて「十分に理解できた」「大体理解できた」とする者が合わせて70%を超えている。また、「議論の段階」に対しては、「他の人の意見を聞くことへの期待が大きい」「どのように議論が進むのか、進め方を知る期待が大きい」とする者がそれぞれ36.4%となっている。

さらに、参加者が議論し、対策や方針を作成することの良い点として、70%を超える学生が「多様な考えを知る機会がある」こととしている。逆に、悪い点について、議論の前段階では、最も多い意見は「感情的な対立が残ってしまう」であった。

つぎに、大学生は日本の未来像についてどのように考えているだろうか。高校生と比較すると大学生は、人口減少と経済・財政について、より悲観的である。裏返せば、社会の実態について高校生より現実的な把握ができていとも解釈できよう。また、医療については期待が高校生に比べ、15ポイント以上高いのも特徴的である。その背景要因として、学生の専攻分野との関連性も考えられる。全般的に技術発展の分野では高校生と同様評価は高いが、環境については高校生より期待感が高い。大学生がより多くの情報や知識を裏付けとして判断をしているとも解釈できよう。

(2) 熟議による自己認識の変化

このような大学生が熟議を経験して、能力の自己評価ではどの項目に変化が見られたのだろうか。今回の熟議に参加した大学生は、事前と事後を比較して、まず全体で見ると、どの項目でも能力が伸びたと評価している。次に、項目ごとで見ると、実施前で自己評価が高い項目の第一位は「規律性」の3.74、第二位は「実行力」の3.61、第三位は「自主性」3.57である。

過去に遡って同データを見ると、2014年は第一位「規律性」、第二位「会話力」、第三位「自主性」「実行力」、2013年は第一位「規律性」、第二位「自主性」、第三位「会話力」となっている。まとめると、熟議に参加する大学生は、能力項目のうち、「規律性」について自己評価の高い者が参加し、そのほか、「自主性」「実行力」「会話力」に比較的自信があると言える。

それでは、事後にはこれらの能力についての自己認識はどのように変化しただろうか。増減を見ると、第一位は「運営力」の+1.09、第二位は「交渉力」+1.00、第三位は「計画力」+0.78である。熟議の成果として大学生が充実感を覚えている点は、異なる立場の人々が様々な意見や考えを出し合ったこと、それらを何らかのかたちでまとめられたことである。ここから、「違う立場の人々の集まるチームを適切に運営する力」の数値が伸びたと考えられる。また、参加した大学生には、これまで自分の意見をきちんと発言する機会が多いとは言えなかった者も見られる。議論のテーブルでは、人との関わりのなかで自分の意見が引き出されたり、明確になったりする経験をしたことから、「人との関わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く」交渉力の自己評価が高まったと思われる。

当然のことではあるが、能力変化については、果たした役割によって異なる傾向があることが予想される。ファシリテーターでは、第一位は「運営力」の+1.25、第二位は「計画力」「貢献性」+1.00、第三位は「交渉力」「会話力」+0.92であり、能力項目10項目の半分が過去には見られないほど高い変化率となっており、熟議のファシリテーター経験を通しての達成感、充実感などの効果が見て取れる。

一方、ワークショップ参加学生では、第一位は「交渉力」の+1.09、第二位は「対応力」+1.00、第三位は「運営力」+0.91となっている。これらの数値も例年のワークショップ参加者に比して高い変化率となっている。全体として、今年度の学生はワークショップの経験がない者が多かったことから、事前では熟議への期待が全般的に低めであった。事後での数値が全般的に高いのは、このギャップの反映とも考えられよう。

(3) 熟議テーマに関する変化

一方、テーマに関する認識や意見の変化は見られたのだろうか。詳しくは上に見たとおりであるが、以下では、(i)項目の一覧と賛否の増減について、「大いに賛成」における変化を大きな変化、「やや賛成」や「普通」における変化をそれに次ぐものとして考察する。また、事後の肯定率（「大いに賛成」「やや賛成」の合計）にも注目する。さらに、(ii)事後の変化について、大学生と高校生の比較を行う（「大いに賛成」を5、「やや賛成」を4、「普通」を3、「やや反対」を2、「反対」を1として平均を算出した数値を用いる）。

なお、テーマに関する質問項目の内容を以下に、模式図（図6-6-1）として示しているので参照されたい。

(i) 肯定派の増減を中心として

まず、①、②、⑥、⑦、⑩に見られるように、「おおいに賛成」が増加し、全体として90～100%の肯定率となっている項目がある。議論を経て、『安心・安全を創るためには、「人と人とのつながりや信頼」が重要であり、「住民同士の熟議」を行うとともに、コミュニティの日常的活動が必要である。』『また、行政や制度だけでなく、住民が互いに助け合うことが必要』であり、『大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある』と、しっかりと認識が固まったようだ。

また、⑧「安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない」については、「普通」が10ポイント近く増加しており、肯定・否定のどちらとも判断できないとの見解に落ち着いている。④「信頼関係、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である」では、「大いに賛成」が25ポイント以上増加し、変化としては大きい結果となっている。

次に、肯定率の変化は見られても数値としては低い項目がある。たとえば、③、⑨である。「住民の役割」の重要性については、その限界を考えたか、自治体や政府の役割の重要性についての気づきであるのか、肯定率は高くなっているが、数値としては、36.4%にとどまっている。また、役割を担うのが「地の人か風の人か」についても、「地の人」の役割を改めて認識した様子が見られるが、肯定率は18.2%である。

さいごに、⑤「施設や設備に頼るだけではないけないこと」については、「やや賛成」が増加しているものの、肯定率が54.5%となっており、意見が分かれる結果となっている。熟議前後で変化は見られていないのは、議論のテーブルにおいて、そのような課題が取り上げられることが少なかったことが予想される。

①「人と人との繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ」

→「大いに賛成」が増加（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕100.0%）

②「安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である」

→「大いに賛成」が増加（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕90.9%）

③「安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている」

→「大いに賛成」が増加（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕36.4%）

④「他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である」

→「大いに賛成」が増加（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕63.6%）

⑤「安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい」

→「やや賛成」が増加。（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕54.5%）

⑥「コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている」

→「大いに賛成」が増加（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕90.9%）

⑦「行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる」

→「大いに賛成」が増加（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕100.0%）

⑧「安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない」

→「大いに賛成」「やや賛成」が増加（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕27.3%）

⑨「安心・安全を創るのは、地の人々の役割であり、風の人とは関わらないものである」

→「やや賛成」が増加（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕18.2%）

⑩「大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある」

→「大いに賛成」が増加（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕90.9%）

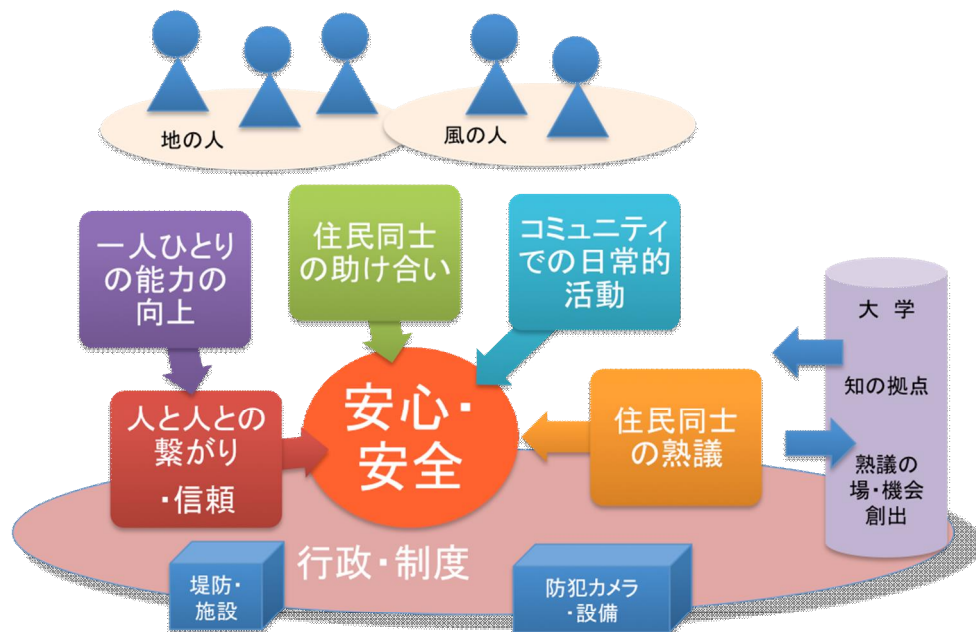


図 6-6-1 安全・安心をめぐる考え方を構成する要因間関係 (図 5-5-1 再掲)

(ii) テーマに関する考え方の変化 ～大学生と高校生の比較～

次のレーダーチャート【図6-2-2】は、「地域の安心・安全についての考え方」の各項目内容に対する肯定派に高い数値を否定派に低い数値を振って、項目ごとに回答者の数値を合計し平均を出したものである。ここでは、「事後の平均値」を大学生と高校生で比較する。一見してわかることは、大学生と高校生でほとんど同じ意見であるということである。ただし、「地域における大学の役割」については、両者で開きがある。大学が直接「地域の安心・安全」について何ができるのか、高校生の想像の範囲を超えていたことが予想される。一方、看護・医療・福祉、健康や栄養、教育・保育、経済といった専門分野で学ぶ大学生は、大学における教育研究がさまざまな領域で「安心・安全」に役に立つこと、大学の地域貢献分野の他の活動も含めて、地域のなかで果たすべき役割があることを、認識できているということであろう。

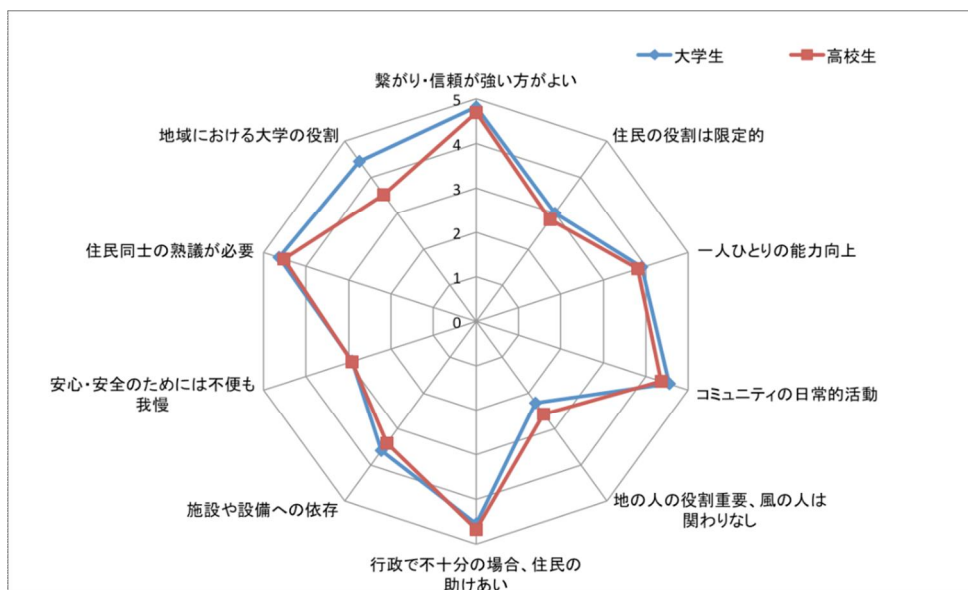


図 6-6-2 地域の安心安全についての考え方 (ポイント) の比較

(吉原恵子)